

19『あなたがここにいればよかったのに』真柴あずき

○ジャンル／SF

○ストーリー／日高まひろは翻訳家を目指しながら、小さな書店で働いている。ある日の昼休み、まひろはコーヒーショップで恋人・高岡季之から突然プロポーズされる。季之が会社に戻ると、見知らぬ男が近づいてきて、「彼と結婚したら、あなたこは不幸になる」と告げる。まひろは言いがかりだと激しく反発。しかし、天野と名乗ったその男は、まひろのことをやけに詳しく知っていた。そして、天野の言葉が次々と現実になっいくうちに、まひろの心は揺れ始める……。

○出演者／男5＋女6＝計11

○上演時間／120分

登場人物

天野大志	(医師)
日高まひろ	(書店員)
日高明広	(まひろの父・大学教授)
森岡李之	(まひろの恋人・広告会社勤務)
宇田川恵菜	(まひろの友人・古着屋店員)
宇田川譲	(恵菜の夫・出版社勤務)
池沢千夏	(恵菜の母)
長山莢子	(大志の姉・編集者)
深見常比古	(書店員)
堀公香	(書店員)
門倉芙佐子	(看護師)

三月一日昼。吉祥寺にあるコーヒーショップ。日高まひろと森岡季之がカウンターで話している。少し離れたカウンターで、天野大志が背中を向けてコーヒーを飲んでいる。

1

季之

悪かったね、仕事中に呼び出して。

まひろ

大丈夫。ちょうど休憩に入るところだったから。

季之

近くでクライアントと打ち合わせをしてたんだ。早めに終わったから、少し

まひろ

だけでも、まひろと話がしたくて。

季之

季之さん、ちゃんとご飯食べてる？

まひろ

食べてるよ。どうして。

季之

この前会った時より、痩せた気がする。

まひろ

この前って、いつだったっけ。

季之

ちようど二週間前。その日も、こうやって、仕事の合間にお茶を飲んだ。

まひろ

そうだ。バレイタインデーだったんだよな。俺、てっきり、ここでチョコが

季之

もらえると思ってたのに。クール宅急便で送ったって言われてがっかりした。

まひろ

ごめんなさい。いつ会えるのかわからなかったから。

季之

謝ることないって。まひろらしいなと思ったんだ。

まひろ

それより、質問に答えて。体調はどうなの？栄養のあるもの食べてる？

季之

そんなに心配なら、まひろが作ってくれればいいんだよ。

まひろ

え？

季之

俺の体調とか、栄養とか考えた料理。俺も、できる範囲で手伝うからさ。

まひろ

わかった。じゃ、いつにする？

季之

え？

まひろ

次のお休みを教えて。同じ日に休めるように調整するから。場所は、季之さ

季之

んの部屋でいいよね？ もし、食べたいものがあつたら——

まひろ

じゃ、君は大きな勘違いをしてる。俺は、単純な意味で料理を頼んだわけ

まひろ

じゃないよ。

季之

それなの？

まひろ

これから先、ずっと、まひろの手料理が食べたい。二人で生きていきたいん

季之

だ。俺と結婚してくれ。

まひろ

結婚？

季之

駄目かな。

まひろ

そんなこと、いきなり言われても。

季之

俺は、よく考えて出した結論なんだけど。

まひろ

でも、知り合ってから、まだ半年しか経ってないのに。

季之

問題は時間じゃなくて、お互いの気持ちじゃないか？

まひろ

それはそうだけど。

まひろ

初めて会った時から、俺は結婚を意識してた。一緒にいて、こんなに居心地

季之の携帯が鳴る。季之が携帯の画面を見る。

季之

まひろ

ごめん。(出て) はい、森岡です。先程はどうも。……え？ 見積りのどこですか。……はい。わかりました。では十分後に。(切って、まひろに) 悪い。さっきのクライアントに呼び戻された。話の続きは、また今度にしよう。

季之

いい返事、期待してるから。行ってらっしゃい。

季之が去る。まひろが見送る。季之の姿が見えなくなると同時に、大志が立ち上がり、まひろの前に立つ。

大志

突然すみません。日高まひろさんですよね。

まひろ

そうですけど。

大志

お話があります。あなたにとって、重要なお話が。

まひろ

はい？

大志

森岡季之さんと結婚してはいけません。プロポーズは断ってください。

まひろ

え？

彼と結婚したら、まひろさんは不幸になる。すぐには信じられないでしょうが、これは確定した事実なんです。

まひろ

あの。どうして私の名前を知ってるんです。誰なんですか、あなた。

大志

ああ、驚かせてすみません。怪しい者じゃないんです。僕は天野大志といい

まひろ

まして、昔、あなたのお父さんにお世話になったことがあります。父の生徒さんってことですか？

大志

ええ、そのようなものです。あなたのこともよく知っていますよ。誕生日は1987年の、1月10日ですよ。

まひろ

そうですけど。

大志

飛鳥女子大学文学部英文科を卒業した後、一年間、翻訳の専門学校に通う。それから現在まで、準備堂書店の吉祥寺店にアルバイトとして勤務中。合つてますよね。

まひろ

ええ、まあ。

大志

趣味は読書と映画鑑賞、特技はおいしいおでんを作ること。苦手なものはトンボ。苦手な理由は、小学3年の時、捕まえようとして、思い切り噛まれたから。知らなかったんですね、トンボが噛むことを。

まひろ

誰に聞いたんですか、そんなこと。

大志

いや、それは。調子に乗り過ぎたかな。

まひろ

もしかして、恵菜？あなた、恵菜と知り合いなんですか？

大志

違います。でも、恵菜さんのパーソナルデータも、ある程度は把握していますよ。池沢恵那さん。現在は結婚して、宇田川って名字になってますよね。

まひろ

ええ。

大志

恵菜さんはあなたと家が近くて、幼稚園の頃からの付き合い。西荻窪の古着屋さんで働いていて、秋に出産を控えています。

まひろ

出産？恵菜に子供が生まれるんですか？

大志

そうか。まだ聞いてなかったのか。

まひろ

どういうこと？あなた、やっぱり、恵菜の知り合いなんですか？

大志

違います。僕には未来がわかるんです。あなたや恵菜さんに、これから起きる出来事が。

まひろ

大志

からかっているんですか、私のこと。  
僕は本気で言っているんです。妊娠しているかどうか、恵菜さんに確かめてください。ちなみに、男の子と女の子の双子です。それが当たっていたら、結婚を考え直すかと約束してください。

まひろ

大志

あなたが不幸になるからです。森岡さんは嘘をついている。あなたに打ち明けていない事実がいくつもあるんです。

まひろ

大志

第一に、仕事のことです。あなたには広告会社の社員だと言っていますが、正確には違う。間もなく、在籍すらなくなるんです。

まひろ

大志

いい加減なこと言わないでください。彼は、あなたを利用しようとしてる。あなたを不幸にしておいて、何の責任も取ろうとしない。自分のことしか考えていないんです。

まひろ

ひどい。あなたに季之さんを侮辱する権利があるんですか。未来がわかるなんて、馬鹿げた嘘をついているのは、あなたの方じゃないですか。父に世話になっただけというのも、出まかせなんでしょう？

大志

まひろ

それは違う。僕は――  
もう何も聞きたくありません。これ以上、言いがかりをつけるなら、名誉棄損で訴えますよ。

大志

まひろさん、一生のお願いです。恵菜さんの妊娠が確認できたら、プロポーズは。

まひろ

あなたの指図は受けません。

大志

だったら、あなた自身で確かめてください。森岡さんが、本当にあなたを幸

まひろ

聞こえなかったんですか。あなたの指図は受けません。  
失礼します。

大志

大志が去る。

まひろ

何なのよ、あの人。

まひろが歩き出す。街の中で、登場人物たちとすれ違う。遠くに季之が現れる。まひろが声をかけるが、季之は気付かない。まひろが季之を追いかける。大志が現れる。まひろに声をかけるが、まひろは気付かない。やがて、季之が振り返り、まひろに気付く。話をする二人を大志が見つめる。大志が去る。登場人物たちも去る。季之も去り、まひろが一人になる。

三月一日夕。小金井市にある、恵那宅。まひろ・宇田川恵菜・宇田川譲が話している。

恵菜　プロポーズ？　遂にプロポーズされちゃったの？  
まひろ　うん。

恵菜　おめでとう！　話したいことって、これだったんだ。

まひろ　前に恵菜が言ってたでしょう。プロポーズされたら、一番に教えろって。

恵菜　そうか。いつかはこういう日が来ると思ってたけど、やっぱり来ちゃったか。

宇田川　そんなに単純に喜んでいいのか。

恵菜　どうしてよ。

宇田川　知り合ってからまだ半年だろ。俺たちだって、一度しか会ってない。それで

宇田川　結婚なんて、ちよつと早いんじゃないか。

恵菜　譲君はどうなのよ。付き合い始めた次の日に、指輪買ってきたじゃない。

宇田川　あれは、俺には恵菜ちゃんしかいないと思ったから。

まひろ　私も、宇田川さんと同じことを言いました。まだ早いんじゃないかって。

恵菜　まさか、断ったんじゃないでしょうね。

まひろ　もう少し考えたいと思ってる。

宇田川　それがいいよ。結婚は一生の問題だし。

恵菜　あんなに小さかったまひろが結婚か。私も年を取るはずだわ。



宇田川  
恵菜

まひろ

宇田川

恵菜

宇田川

まひろ

宇田川

恵菜

まひろ

宇田川

恵菜

宇田川

まひろ

宇田川

まひろ

宇田川

まひろ

宇田川

恵菜ちゃん、まひろちゃんと同い年だろう。  
この子は私にとって、妹みたいなものだから。まひろって、子供の頃はおとなしくて、放っておくと何時間でも、一人で本を読んでいるわけ。それじゃ体に悪いよって、私が外に引っ張り出して。  
恵菜のおかげで、泳げるようになったんだよね。  
まひろちゃん、カナヅチだったの？  
そう。私が鍛えたの。25メートル泳げるまで夕飯抜きだと言って。  
それ、お姉さんっていうより兄貴だよ。  
でも、とっても楽しかった。うちは母親がいなし、父親も家を空けることが多いでしょう。恵菜がいたから、寂しい思いをしなくて済んだんです。  
お母さんが亡くなったのって、小学生の時だけ。  
15年前よ。私たちが小学6年の時。  
自転車で買い物に出かけて、事故に巻き込まれたんです。スピードを出し過ぎた車がトラックに追突して、その衝撃で歩道に乗り上げて。  
その時、まひろのお父さんは日本にいなかったんだよね。  
どこの大学で講義をしたの？  
その時は設計の仕事でした。フィレンツェの美術館を手がけて。  
でも、すぐに帰ってきたんだらう？  
はい。葬儀が終わったら、また戻りましたけど。  
ひどいな。一人娘を置いていくなんて。  
いえ、私も一緒に行きましたよ。ほとんどホテルで留守番でしたけど、何度か建築現場に行きました。18世紀の教会をモチーフにした建物で、すごく綺麗でした。これを父が設計したんだと思って、誇らしかったのを覚えてま

宇田川　　いいなあ。俺も娘ができたなら、こんなふうに言われたいなあ。  
恵菜　　だったら、尊敬されるようなお父さんになりなさい。  
宇田川　　まだ先の話だろ。  
まひろ　　ねえ、恵菜。違ってたらごめん。もしかして、赤ちゃんができた？  
宇田川　　え？  
恵菜　　（まひろに）よくわかったね。実は、今日、病院に行ってきたところ。  
まひろ　　本当に？  
宇田川　　嘘だろ？　俺、何も聞いてないよ。  
恵菜　　後で言おうと思ってたの。三カ月に入ったところだって。  
宇田川　　やった！　やったな、恵菜ちゃん！  
宇田川　　秋にはお父さんだよ。しかも双子の。  
恵菜　　双子？　駄目だ。嬉し過ぎて言葉が出てこない。  
まひろ　　恵菜。本当に双子なの？　間違いない？  
まひろ　　何よ、難しい顔しちゃって。双子じゃいけないの？  
恵菜　　ごめん、そうじゃないんだ。ちよつと気になることがあって。  
まひろ　　気になることって？　ちゃんと話してよ。  
恵菜　　昼間、季之さんと会った後、知らない男の人に話しかけられたんだ。プロポーズを断れ、結婚したら不幸になるって。  
恵菜　　何それ。占いの押し売り？  
まひろ　　そうじゃなくて、その人には未来がわかるんだって。恵菜に双子ができるってことは、その人に言われたの。男の子と女の子だって。  
恵菜　　嘘でしょう？　まだ、どっちかわからないのに。

宇田川  
まひろ

（まひろに）本当に知らない人なのか？二人の同級生とかじゃなくて。全然見覚えのない顔でした。でも、私の誕生日とか、苦手なものとか、いろいろ知ってる。

恵菜  
まひろ

イヤだ。もしかして、ストーリーカー？だったら、警察に行った方がいいよ。ストーリーカーって感じじゃなかった。言ってることは変だったけど。

宇田川  
まひろ

他には、どんなことを言ってたんだ？季之さんが私を利用しようとしてるとか、広告会社に勤めてるのは嘘だとか。何それ。わけわかんない。

宇田川  
恵菜

会社のことで嘘なんかつくかな。調べればすぐにわかるのに。全部、そいつの妄想だよ。私の妊娠だって、適当に言ったことが、たまたま

まひろ

当たっただけ。そんなやつ言うことなんか、本気にすることないって。わかってる。ただ、双子ってことまで当てたから、びっくりしただけ。

恵菜の携帯が鳴る。恵菜が携帯の画面を見る。

恵菜

あれ、お父さんだ。（出て）もしもし。

恵菜が部屋の隅に行き、通話を続ける。

宇田川  
まひろ  
宇田川

双子か。名前、二百個は考えないとな。すみません、宇田川さん。おめでたいニュースなのに、ちゃんと喜ばなくて。いいんだよ。もし、またストーリーカーが現れたら、すぐ電話してくれ。二度とまひろちゃんに近付けないようにしてやるから。

まひろ ありがとうございます。

恵菜が電話を切る。

宇田川 報告したか？ お義父さん、喜んでただろう？

恵菜 できなかった。お父さん、自分の用件だけ言って、さっさと切るんだもん。  
用件って？

宇田川 明日、夫婦で健康診断に行くんだって。桜花大学の付属病院。

まひろ 桜花大学って、国立じゃなかった？ どうしてそんな遠いところに？

恵菜 昨日、うちに初めて来たお客さんが、その医者だったんだって。

まひろ うちって、クリーニング屋さんの方？

恵菜 そう。で、その人が健診を勧めてくれたんだって。自分の紹介なら安くできるからって。

宇田川 それで？ 話はそれだけ？

恵菜 「俺にもしものことがあったら、母さんを頼む」だって。いちいち大袈裟なんだから。

宇田川 そんなこと言ってないで、もう一度、電話しようよ。

恵菜 そうだね。早く喜ばせてあげないとね。

まひろ 恵菜。本当におめでとう。

恵菜 ありがとう。まひろも早く、オッケーしなよ。

恵菜と宇田川が去る。

三月一日夕。小金井市にある、まひろ宅。日高明広がやってくる。まひろが明広に歩み

寄る。

明広  
まひろ

明広  
まひろ

明広  
まひろ

明広  
まひろ

明広  
まひろ

明広  
まひろ

明広  
まひろ

明広  
まひろ

明広  
まひろ

明広  
まひろ

明広  
まひろ

ただいま。

お帰りなさい。私も、さつき、帰ってきたところなんだけど。何か作ろうか？  
必要ない。夕食はゼミの学生と、大学の近くで済ませてきた。

お父さん、人気あるんだね。  
そういうことじゃない。卒論のテーマが決まらない学生から相談を受けただけだ。私が学生の頃は、専攻に分かれる段階で自然と決まったものだが。

同級生で、もう間に合わないって時になってから決めた人が結構いたよ。  
恐ろしい話だな。

私はお父さんに言われた通り、2年生の秋に必死で考えた。そんなに早く決めたのは、私ぐらいだったけど。

帰ってきたばかりだと聞いたな。まひろも夕食を済ませてきたのか。

ご飯はまだ。恵菜の家に寄ってきたんだ。報告したいことがあったから。  
報告？

お父さんも聞いてくれる？

手短かに頼む。明日までに目を通したい資料が幾つかあるんだ。  
わかった。実は、今、お付き合いをしている人がいます。森岡季之さんっていう人で、私より5つ年上の32歳。青山にある、広告会社の営業部で働いてます。

それで。

今日、昼休みにちょっとだけ会って、その時、結婚を申し込まれました。  
それで。

ま

まひろ  
明広  
まひろ  
明広  
まひろ  
明広  
まひろ  
明広  
まひろ  
明広  
まひろ  
明広  
まひろ  
明広  
まひろ  
明広  
まひろ  
明広  
まひろ  
明広  
まひろ

それだけです。ああ、緊張した。  
結論に至っていないように思えるが、気のせいかな？  
返事はこれから考えます。まだ半年しかお付き合いをしてないから。  
つまり、経過報告ということか。  
そう。  
書齋に行っていないか。仕事を始めたい。  
もう？ どんな性格だとか、収入はいくらだとか聞かないの？  
なぜそんなことを聞かなければならない。  
なぜって、普通、父親なら聞くかなと思つて。  
まだ経過報告の段階なんだろう。詳しいことは結論が出てから聞く。  
結論を出すために、お父さんの意見が聞きたいの。  
私の意見？  
結婚を決めるのに、半年は短いと思う？  
それは人それぞれだ。答えはおまえが出すしかない。迷っているなら、納得  
が行くまで、考えるんだ。おまえの頭で。  
はい。  
結論が出たら、相手連れてこい。質問責めにしてやる。  
わかつた。  
行くぞ。  
待つて、お父さん。天野って名字に聞き覚えはある？  
天野？  
今日、その名字の男の人と会つたの。昔、お父さんに世話になつたつて言わ  
れたんだけど、心当たりある？

明広  
まひろ  
天野なら、学生時代の友人の名前だ。もう20年も前に亡くなったが。  
亡くなった？

明広  
まひろ  
ああ。その男以外に、天野という知り合いはいない。

明広  
まひろ  
その人の子供だって可能性は？

明広  
まひろ  
子供か。確かに、娘と息子が一人ずついる。しかし、葬儀で一度、話をした  
だけだ。それで世話になったとは言わないだろう。

まひろ  
そう。じゃ、私が聞き間違えたのかな。

明広  
まひろ  
そうとしか思えない。次に会った時、確認してみる。

明広  
明広が去る。

まひろ  
次はないんだけどな。

三月二日昼。吉祥寺にある、準備堂書店の休憩室。堀公香が机に向かって宣伝用のP O Pを作る作業をしている。まひろが公香に歩み寄る。

まひろ

戻りました。

公

香

あれ。まひろさん、早くないですか。

まひろ

在庫整理が残ってるからね。食後のコーヒーは我慢することにした。

公香

真面目だな、まひろさんは。休憩はバイト代出ないのに。

まひろ

でも、遅れることもあるじゃない。(見て)これ、新作のPOP?

公香

はい。私が今、一番好きな漫画です。知ってます? 『進撃の巨人』。

まひろ

聞いたことはあるけど、読んでない。

公香

たまには漫画も読まなきゃダメですよ。人生、半分損してますよ。

深見常比古と宇田川がやってくる。

深見

よかった。まひろちゃん、帰ってきてた。

まひろ

お疲れさまです。

深見

宇田川さんが、話があるんだって。よかったら、下の喫茶店に行ってくれば?

宇田川

いや、ここでいいですよ。すぐに終わりますんで。



公香  
深見  
（立ち上がったって）深見さん、私、POP出してきます。もうできたの？ 見せて見せて。（見て）何これ。すごい迫力。公香ちゃん、

公香  
無理ですよ。

深見  
どうして？ こんなにうまいのに。

公香  
こんなの、ただの物真似じゃないですか。自分だけの絵が描けないと、プロにはなれないんですよ。漫画家、なめないでください。

公香が去る。

宇田川

（見送って）怖いな。  
公香ちゃん、うちに来る前は、漫画家のアシスタントをやってたんだって。

宇田川

結構、重宝されてたみたいよ。  
へえ、それで。このコミックコーナー、評判いいんですよ。品揃えも充実

深見

してるし、何よりPOPのレベルが高いって。  
そう。まだ若いから心配だったんだけど、思い切って、コーナー任せてよか

まひろ

った。適材適所っていうのが僕のモットーだね。だから、まひろちゃんにも  
海外文学のコーナーを――  
深見さん、そろそろいいですか。私、もう休憩時間が終わりなので。

深見が去る。

まひろ 宇田川 まひろ 宇田川 宇田川 宇田川 宇田川 宇田川 宇田川 宇田川 宇田川 宇田川 宇田川 宇田川 宇田川 宇田川 宇田川 宇田川 宇田川 宇田川 宇田川 宇田川

何ですか、話つて。もしかして、恵菜に何か。  
いや、そうじゃないんだ。森岡さんのことで、ちょっと。

季之さんの？

昨日の話だよ。変な男に、森岡さんが嘘をついてるつて言われたんだろう。

ええ。それが何か。

何となく気になつてね。大学で同期だったヤツが、同じ会社で働いてるから、

電話して聞いてみたんだよ。別に森岡さんを疑ったわけじゃなくて、念のため

めつていうか、軽い気持ちで。そしたら。

何ですか。はっきり言つてください。

森岡さんは正社員じゃなくて、契約社員だつて言われた。今期いっぱい、つ

まり、あと一カ月で契約が切れる。来月から、その会社にはいなくなるつて、

いなくなる？ 辞めるつてことですか？

やっぱり聞いてなかつた？ 契約社員だつてことも？

ええ、全然。

そうか。でも俺、こういうのは嘘とは違うと思うんだよね。その会社にいた

ことは間違いないわけだし。

でも、今月で辞めるんでしょう？ 昨日会つたのに、そんなこと一言も。

きつと、何か事情があるんだよ。それより、俺が気になるのは、変な男の方

なんだ。なぜそいつは、森岡さんのことを知つてたんだろう。

私に聞かないでください。

これは、俺の想像なんだけど。もしかして、ストーリーカーされてるのは、森岡

さんの方じゃないのかな。

どういうことですか？

宇田川

たとえば、森岡さんには、まひろちゃん以外に付き合ってる女性がいるんだよ。で、その女性が、君との結婚を阻止するために、昨日の男を雇った。あ

まひろ

季之さんは、そんな人じゃありません。

宇田川

だから、たとえばの話だよ。でも、そう考えると、筋が通る気がするんだよな。森岡さんって、いかにもモテそうじゃないか。俺と違って。

まひろ

それはそれでですけど。

宇田川

そこは否定してほしかったな。

まひろ

ごめんなさい。

宇田川

とにかく、一度、腹を割って話し合ってみた方がいいと思う。疑問が残ったままじゃ、結婚なんかできないだろう。

まひろ

わかりました。話してみます。

宇田川

じゃ、俺はこれで。

宇田川が立ち上がる。そこへ、深見と公香がやってくる。

深見

あら。もう帰っちゃうの？　せつかくドーナツ買ってきたのに。

宇田川

すみません。それじゃ、また。

宇田川が去る。

深見

で？　結婚式はいつ？

まひろ

深見さん、立ち聞きしてたんですか？

深見

まひろ

深見

まひろ

深見

公香

まひろ

深見

まひろ

深見

まひろ

深見

まひろ

公香

まひろ

公香

深見

まひろ

違う違う。結婚っていう単語だけが飛び込んできたの。まひろちゃん、いつの間にかそういうことになったわけ？ 黙ってるなんてひどいじゃない。

まだ決まったわけじゃないんです。相手は誰？ 僕の知ってる人？ どこで知り合ったのか教えてよ。

最初は、ドノクニヤで。ドノクニヤって、ドノクニヤ書店？ 駅ビルの？ うちのライバルとの結婚

なんて許しませんよ。

深見さん、うるさい。まひろさん、続けて。

半年前、ドノクニヤに行った時、つい、いつもの癖で、棚の整頓をしちゃっ

たんですね。そしたら、店員と間違えて、話しかけてきた人がいて。

何て言われたの？

簡単に覚えられる、将棋の本はないでしょうかって。仕事で使うから。

どういう仕事なの、その人。

広告会社の営業です。取引先の部長さんが将棋ファンだったんです。

それで、一緒に探してあげたのね？

はい。見つかってから、やっと、その店員じゃないって言えました。その

お礼について、食事をご馳走してもらったんです。

食事って？ イタリアンですか？ それともフレンチ？

そんなのじゃなくて、普通の焼き鳥屋さん。

シケてますね。

でも、素敵な人に出会えたんだからいいじゃない。

(時計を見て) いけない、もう休憩終わってる。私、在庫整理してきますね。

まひろが去る。

深見 よかった。まひろちゃん、男っ気がないから心配してたんだ。

公香 話を聞いただけで、どうして素敵だっかわかるんです？

深見 わかるわよ。真面目なまひろちゃんが選んだ人だもの。

公香 甘いですよ、深見さん。ダメ男を選ぶのは、大抵、真面目な女なんです。

深見 詳しいのね、公香ちゃん。

公香 うちは五人姉妹ですから。姉たちの恋愛を、細かく観察してきました。漫画

のネタになると思っ

深見 やっぱり、向いてるんじゃないかな、漫画家。

公香 その話はどうですか。

深見と公香が去る。

三月二日夕、コーヒーショップ。季之が座っている。まひろがやってくる。

季之 まひろ。

まひろ ごめんなさい、遅くなって。

季之 全然。珍しいね、まひろから会いたって電話くれるなんて。

まひろ でも、すぐに会えるとは思ってなかった。

季之 俺も話したいことがあるんだ。多分、まひろの話と同じだと思う。

まひろ 何？

季之 宇田川さんから聞いたんだろう。俺が正社員じゃないってこと。

まひろ ……

季之

黙ってごめん。最初に言えばよかつたんだけど、切り出すタイミングを逃したっていうか。うちの会社、中途採用はほとんど契約社員なんだよ。でも、仕事はもちろん、待遇も正社員と変わらない。ただ、一年ごとに査定があるってだけで。

まひろ

ずっと黙ってるつもりだったの？

季之

そんなわけないだろう。今年は更新しないって決めたのは、一週間前なんだよ。期限のぎりぎりまで迷ってて。会社からは、残れって言われたんだけど。

まひろ

どうして？他にやりたいことがあるの？

季之

ああ。自分で会社を作ろうと思ってる。

まひろ

独立するってこと？

季之

前から考えてはいたんだよ。でも、先立つものがなくて。資金をためるために、今の会社を選んだんだ。忙しい代わりに、給料はいいから。

まひろ

じゃ、来月から始めるの？

季之

いや、今月は残務整理もあるし、辞めてから準備にかかるよ。多分、夏には開業できると思う。できれば、まひろにも力を貸してほしい。

まひろ

私に？

季之

新しい会社では、マーケティングをやりたくて。今の会社の流れで、クライアントは外資系が中心になると思う。契約書一つ作るにも、英語は欠かせないや、もっと前から話すべきだったんだよな。本当は昨日、このことも話したかった。

まひろ

仕方ないよ。忙しかつたんだから。

季之

本当にごめん。許してほしい。季之さんに悪気はなかったんだから。

まひろ

許すとかじゃないでしょう。季之さんに悪気はなかったんだから。

まひろ

許すとかじゃないでしょう。季之さんに悪気はなかったんだから。

季之

許すとかじゃないでしょう。季之さんに悪気はなかったんだから。

まひろ

許すとかじゃないでしょう。季之さんに悪気はなかったんだから。

まひろ

許すとかじゃないでしょう。季之さんに悪気はなかったんだから。

まひろ

許すとかじゃないでしょう。季之さんに悪気はなかったんだから。

季之 まひろ  
季之 まひろ  
季之 まひろ  
季之 まひろ  
季之 まひろ  
季之 まひろ  
季之 まひろ  
季之 まひろ  
季之 まひろ  
季之 まひろ  
季之 まひろ  
季之 まひろ

季之　　そう言ってもらえて嬉しいよ。会社のこと、準備が進んだら、また話すから。  
まひろ　　うん。  
季之　　でも、どうして宇田川さんは、俺のこと、調べたりしたのかな。  
まひろ　　昨日、季之さんと別れた後、知らない男の人に言われたの。季之さんが嘘を  
季之　　ついでるって。  
まひろ　　知らない男？  
季之　　恵菜は私のストーリーカードだって言ったけど、そんな感じじゃなかったの。そし  
季之　　たら、宇田川さんが、その人は季之さんの恋人に頼まれたんじゃないかって。  
季之　　何言ってるんだ？俺の恋人はまひろだろう。  
まひろ　　だから、私以外にも恋人がいて、その人が結婚を邪魔しようとして。  
季之　　ちよつと待ってくれよ。俺ってそんなに信用がないのか。  
まひろ　　そうじゃなくて、宇田川さんは、季之さんがモテそうだからって。  
季之　　まひろと違ってロクに会えてないのに、二股かけてる余裕なんかないよ。  
まひろ　　モテるってところは否定しないんだ。  
季之　　怒るぞ。俺はそんなに器用な人間じゃない。一つのことにならんと、他  
まひろ　　が見えなくなるんだ。  
季之　　私もそう。書店の仕事が楽しくて、最近、翻訳の勉強をサボってる。  
まひろ　　でも、諦めてないんだろ。翻訳家になる夢。出版社にも、売り込み、続けて  
季之　　るんだよな。  
まひろ　　半年に一度ぐらいは。二カ月前にも一本、サンプル原稿をいろんな出版社に  
季之　　送ったんだけど。どこからも連絡が来てないんだ。  
まひろ　　頑張れよ。応援してるから。

季之　それで？　その男、他にはどんなこと言ってたんだ？

まひろ　プロポーズを断れ、結婚したら不幸になるって。

季之　まさか、断るつもりか？

まひろ　もう少し時間が欲しい。別にその人に言われたからじゃないよ。結婚は一生の問題だから。

季之　わかった。駅まで送るよ。家まで送りたいけど、また会社に戻るから。

まひろと季之が店の外に出る。

季之　今度、そいつが現れたら、すぐに俺を呼んでくれよ。

まひろ　でも、ちやんとやめてくれて言ったから。もう大丈夫だと思う。

季之　そんなのわかるもんか。俺は一日でも早く、まひろと一緒に暮らしたい。ま

まひろ　ひろを守りたいんだ。俺じゃ頼りないかもしれないけど。

季之　そんなことない。

まひろ　気持ちが決まったら、いつでも電話してくれ。すぐに飛んでいくから。

季之　うん。

まひろと季之が去る。



三月三日夕。国立市にある、桜花大学付属病院の病室。池沢千夏がベッドに座っている。横に恵菜と看護師の門倉芙佐子が立っている。門倉はカルテに書き込みをしている。

恵菜 お母さん、何か欲しいものある？ 下のコンビニで買ってくるよ。

千夏 そうね。できればアイスクリームが食べたいな。

門倉 今夜は絶食ですよ。明日、もう一度、詳しい検査をしますから。

恵菜 そうなんですか。残念。

門倉 たった一日の辛抱です。検査が終わったら、バケツサイズでどうぞ。

千夏 そんなに食べられません。

門倉 そうですか？ 私は楽勝ですけど。

まひろがやってくる。紙袋を持っている。

まひろ おばさん、こんにちは。

千夏 あら、まひろちゃん。どうしたの？

まひろ (紙袋を示して) これ、いつもおばさんが読んでる雑誌。今日が発売日だったから、早く読みたいんじゃないかと思って。

千夏 ありがとう。そんなの、恵菜に渡せばよかったのに。

まひろ

でも、おばさんの顔も見たかったから。

門倉

ご親戚の方？

恵菜

いえ、私の幼なじみです。子供の頃から家族ぐるみの付き合いで。

門倉

そう。いいお友達ですね。それじゃ、また明日。

恵菜

ご苦労さまでした。

門倉が去る。

千夏

（まひろに）恵菜に聞いたの？ 私が入院してること。

まひろ

今朝、メールもらって、びっくりした。健康診断だと思ってたから。

恵菜

血液検査の数値がよくなかったんだって。健康診断だって思ってたから。

まひろ

んが、すぐに検査入院の手配をしてくれたんだ。

千夏

その人、お店のお客さんだったんでしよう？

そうなのよ。去年は忙しくて、健康診断を受けてないって言ったたら、その場で病院に電話してくれたの。自分の身内ってことにして、すぐ受けられるようにしますって。

恵菜

うちのお父さんもせっかちだから、その人のこと、すっかり気に入っちゃって。昨日がちょうど定休日だから、一緒に行こうって話になったんだって。

まひろ

おじさんの結果は？

恵菜

健康そのもの。お酒も飲むし、揚げ物も好きだし、引っかかるなら、お父さんの方だと思ってたのに。

千夏

それより、聞いたわよ、まひろちゃん。結婚が決まったんだって？

まひろ

恵菜。

恵菜  
まひろ  
千夏  
まひろ  
恵菜  
まひろ  
千夏  
まひろ  
恵菜  
まひろ  
千夏  
まひろ  
まひろ  
恵菜  
まひろ

いいでしょ、おめでたいことなんだから。  
でも、まだ返事をしてないのに。  
あら。どうして？  
いろいろ考えたいことがあって。  
もしかして、お父さんに遠慮してるの？ まひろちゃんがお嫁に行ったら、  
お父さんが一人になるから。  
そういうわけじゃないんだけど。  
お父さんのことは私に任せて。近所なんだし、ちよくちよく様子を見に行く  
から。  
ありがとう、おばさん。  
実はね、まひろちゃん。おばさん、ガンが見つかったのよ。  
え？  
うんと初期の食道ガン。今なら、内視鏡の手術だけで、ほぼ100パーセン  
ト治るんだって。だから安心してちょうだい。  
そうなんだ。  
普通の健診だけじゃ、発見は無理だったみたい。しつこく検査したおかげで  
見つかったの。  
手術はいつ？  
まだ決まってない。どこかに転移してないかどうか、調べてからだって。  
そう。  
こんなこともあるのね。たまたま勧められた健診で、ガンがわかるなんて。  
よかったね。天野先生が店に来てくれて。  
天野？ そのお医者さん、天野って名前なの？

恵菜

そうよ。それがどうかした？

まひろ

どんな人なのかなと思って。お婆さんの手術を任せる人だから。

恵菜

手術は違う先生がするんだ。天野先生の専門は循環器内科なんだって。

まひろ

恵菜も会ったの？

恵菜

会ったよ。お札を言いたかったから。

まひろ

どんな人だった？

恵菜

どんなって？

まひろ

年齢とか、見た目とか。

恵菜

年は、私たちよりちよつと上ぐらいじゃないかな。でも、頼りになる感じだったよ。ねえ、お母さん。

千夏

本当にいい先生よ。もしかしたら、前にも、うちの店に来てたかも。

恵菜

え？ 初めてって言ってなかった？

千夏

天野先生はそう言ってた。でも、どこかで会ったような気がするのよね。

三月三日夕。桜花大学付属病院の廊下。大志がやってくる。後を追って、門倉がやってくる。

門倉

天野先生。先生に会いたいって人がいるんですけど。

大志

僕に？ 誰ですか？

門倉

ほら、先生の親戚の池沢さん。あの人の娘さんのお友達です。先生にお礼が

言いたいんですって。

まひろが大志に歩み寄る。

門倉  
まひろ  
大志  
門倉

(まひろに)こちらが天野先生です。ええと。  
日高まひろです。この度は、池沢千夏さんがお世話になりました。  
いや、僕は何も。  
じゃ、私は仕事に戻ります。ごゆっくり。

門倉が去る。

大志  
まひろ  
大志  
まひろ  
大志  
まひろ  
大志  
まひろ  
大志  
まひろ  
大志  
まひろ

お見舞いにいらしたんですか。  
ええ。まさか、お医者さんだとは思いませんでした。  
よく言われます。医者には見えないうつて。  
これって、偶然ですよね。  
何がですか。  
あなたが勧めた健診で、おばさんの病気がわかったことです。  
偶然じゃないと言ったら、僕の言うことを信じてくれますか。  
まさか。一応、聞いてみただけです。  
森岡さんに確認しましたか。彼がついた嘘について。  
あんなの、嘘とは言えません。ただ切り出すきっかけがなかっただけで。  
ものはいよいよですね。では、恵菜さんの妊娠はどうでした。  
適当に言ったことが当たっただけでしょう？  
自然妊娠の場合、双子が生まれる確率は百分の一と言われています。そのうち、男女の双子である確率は約四割。つまり、0.4パーセントなんですよ。  
これでも適当と言えますか。

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

恵菜は、性別はまだわからないって言ってました。それも当たってたから、信じてくれますか。予知能力なんて非科学的なこと、まともあなた、本当にお医者さんですか。知り合いで天野って人がいると思いますか？お父さんはいかがです。天野って名字に反応はありましたか。知り合いで天野って人は一人だけだつて。大学時代の親友ですよ。僕は、その息子なんです。証拠はありますか。証拠はありますか。あなたは、父に世話になったと言いましたよね。でも、父が天野さんの息子さんに会ったのは、20年も前なんです。お父さんにとつてはそうでしょう。でも、僕は何度もお会いしてるんです。イベントやセミナーで、お父さんの講義を受けてきました。機会がなくて、お話ししたことはありませんが。それだけで、世話になったって言えるんでしょうか。言えますよ。あなたも、お父さんの講義を聞けばわかる。お父さんの建築に對する姿勢から、いろんなことが学べましたから。お世辞にしか聞こえませんが。でも、本当のことです。お父さんは僕の恩人です。だから、あなたにも不幸になつてほしくないんです。絶対に。おばさんに健診を勧めてくれたことにはお礼を言います。でも、これ以上、私の未来に口を出すのはやめてください。心配してもらわなくても、ちゃんと幸せになりますから。

大志のPHSが鳴る。大志が出る。

大志 はい。わかりました。(切って、まひろに)すみません。戻らないと。

まひろ どうぞ。私も帰りますから。

大志 まひろさん。もうすぐ、仕事の依頼が来ますよ。

まひろ 何ですって？

大志 初めての翻訳の仕事です。この予言が当たったら、考え直してください。いいですね。

大志が去る。

三月四日昼。準備堂書店の休憩室。深見と長山莢子が座っている。まひろが二人に歩み寄る。

まひろ

お待たせしました。

深見

まひろちゃん、遅いわよ。

まひろ

すみません。こちら、長山莢子さん。遊泳社で、海外文学の編集をされてるの。

深見

（名刺をまひろに渡して）はじめまして。長山です。今日は、日高さんにお

まひろ

願いしたい仕事があつて伺いました。

深見

仕事つて、翻訳のですか。

莢子

そうよ。決まってるじゃない。

まひろ

日高さんがうちの社に送られた、サンプル原稿を読んだんです。私が担当し

深見

ている作家の作風にぴったりだと思ひました。題材は、O・ヘンリーの『賢

深見

者の贈り物』でしたね。なぜこの作品を選んだんですか。

子供の頃から、大好きな小説なんです。短いのに、たくさん情景が浮かんで

くるのが素晴らしいと思ひました。

あれは僕も好きだな。夫婦がお互いを思いやつて、クリスマスプレゼントを



菟子 日高さんの翻訳、私はとてもいいと思いました。上司は、少し硬いんじゃないかな

深見 いかと言いましたが、そこに魅力を感じたんです。

深見 上司って、西脇くんのこと？

菟子 はい。深見さんとは、昔からの知り合いだそうですね。

深見 そうなのよ。年は僕の方が2つ上で、西脇くんがまだ新人の時、研修でうちに

深見 西脇が、深見さんによろしくと言ってました。待たせて悪かったと。

菟子 じゃ、深見さんが紹介してくれたんですか？

まひろ 違う違う。僕は電話をしただけ。日高って女性から原稿が届いたら、絶対読

深見 んでねって。

菟子 西脇が謝ったのは、二カ月前に送られた原稿を、放っておいたことに対し

てです。私が仕事を依頼しようと思ったのは、純粹に出来がよかったから。

それ以外に理由はありません。

公香がやってくる。コンビニの袋を持っている。

公香 今、何て言いました？ 仕事の依頼？

深見 公香ちゃん、悪いけどお昼は奥で食べて。

公香 (菟子に) まひろさん、翻訳の仕事ができるんですか？

菟子 ええ。お願いしたくて来たんです。

公香 ジャンルは何ですか？ 純文学系？ それともミステリ？

深見 公香ちゃん、空気を読んで。すみません、長山さん。

菟子 (公香に) あなた、さつき、コミックコーナーにいた人ね。

公香  
菟子  
公香  
深見

堀公香です。アルバイトだけど、コミックの棚を任されています。それじゃ、あのPOPを描いたのはあなた？ 『進撃の巨人』  
そうです。  
『キングダム』も？ 『坂本ですが？』も？ いいセンス持ってるのね。  
あなたこそ。  
どうしてそんなに偉そうなのよ。長山さん、後はまひろちゃんと二人で話してください。

深見と公香が去る。

菟子  
まひろ  
菟子  
まひろ  
まひろ  
菟子  
まひろ  
まひろ  
まひろ

楽しそうな職場ね。  
すみません、騒がしくて。  
それじゃ、本題に入りましたようか。今回、お願いしたいのは、アメリカの作家、デイビッド・レイニーの新作です。（封筒を取り出して）ジャンルは児童文学。四百字詰の原稿用紙に換算して、約五十枚の短編です。  
（受け取って）児童文学ですか。  
気が進みませんか。  
そうじゃないんです。ただ、西脇さんのご指摘通り、私の文章は硬いので。読み手が子供だからといって、甘ったるい文章にする必要はありません。『賢者の贈り物』のように訳してください。期間は一週間です。  
一週間で五十枚？  
厳しいとは思いますが。でも、それぐらいのペースでやっていたただかないと。わかりました。よろしくお願いします。

莢子

まひろ

莢子

まひろ

莢子

まひろ

莢子

まひろ

莢子

まひろ

莢子

まひろ

莢子

こちらこそ。さてと。ここからは、個人的な話です。日高さんと私には、ちよつとした繋がりがあるんですよ。

繋がり？

私の父が、日高さんのお父さんと親しかったです。と言っても、私は一度しかお会いしてませんが。

それはいつですか。

20年前。父の葬儀の時です。父はクモ膜下で、突然のことだったので、私たち家族は、どうしていいかわからなかったんですね。そしたら、あなたのお父さんが真っ先に駆けつけて、最後まで手を貸してくださいました。葬儀

の後には、困ったことがあったら、いつでも頼れと仰いました。その一言が、どんなに心強かったか。いつか、ちゃんとお礼を言いたいと思ってたんです。長山さん。失礼ですが、ご結婚は。

してますよ。息子が一人います。

結婚される前の名字は、何だったんでしょうか。

天野です。言っておきますが、お父さんにお世話になったことと、仕事とは別ですよ。

弟さんがいらつしやいますか。お医者さんの。

大志をご存じなんですか？  
知り合いが、弟さんの病院に入院してるんです。そこで会いました。

そうだったんですか。私が言うのも何ですけど、大志はきつと、優秀な医者になると思いますよ。医学部を目指すって言い出した時は、はつきり言って劣等生でした。でも、こっちが心配になるほど必死で勉強して。大学の卒業式では、代表で答辞を読んだんですよ。母は号泣してました。私もですけど。

まひろ 自慢の弟さんなんですね。  
菫子 大志には言わないでください。あの子、褒められるのが大嫌いなんです。  
まひろ わかりました。

まひろと菫子が去る。

三月四日夕。桜花大学付属病院の病室。恵菜が居眠りをしている。宇田川がやってくる。宇田川が上着を脱いで、恵菜の肩にかける。恵菜が目を覚ます。

恵菜 カツ丼おかわり。

宇田川 どんな夢見てるんだよ。

恵菜 食べても食べても、お腹が減るんだもの。やっぱり三人分だからかな。

宇田川 それより、まひろちゃんも一緒なんだ。俺たちに話したいことがあるって。

まひろがやってくる。

まひろ おばさんは？

恵菜 まだ検査。どうしたの。深刻な顔して。

まひろ また予言が当たったの。

恵菜 へ？

まひろ 昨日、天野先生に言われたんだ。翻訳の仕事が来るって。そしたら、今日、本当に遊泳社の人の仕事を持ってきて。しかも、その人、天野先生のお姉さんだったの。

宇田川 大丈夫か、まひろちゃん。全然、話が見えないよ。

恵菜 天野先生っていうのは、健診を勧めてくれた人で。え？ 予言って言った？

まひろ なんて天野先生が出てくるわけ？

恵菜 だから、私に結婚をやめろって言ったのは、天野先生なのよ。

まひろ 冗談でしょう？

恵菜 私だって、冗談だと思いたい。でも、本当なの。

宇田川 医者がストーリーカーってことか？ よし、俺が話をつけてくる。

恵菜 ちよっと待って。天野先生がストーリーカーだなんて有り得ないよ。

宇田川 どうして言い切れるんだ？

恵菜 譲君は会ってないからわからないだろうけど、私は話をしたものだ。あんなに

親身になってくれるお医者さん、他にいないよ。お母さんの担当の先生も言

った。天野先生は、診察も研究も手を抜かない。自分が患者だったら、こ

んな医者には診てほしいうて。

宇田川 ずいぶん肩を持つんだな。

恵菜 天野先生のおかげで、お母さんの病気が見つかったんだよ。私、そんな人を

疑いたくない。食道ガンって、自覚症状がないから、発見がすごく難しいん

だ。って。なのに簡単に転移するから、厄介なんだ。もし、今、見つから

なかつたら、手遅れになってたかもしれないんだよ。

まひろ ごめん、恵菜。私、自分のことばかり。

千夏と門倉がやってくる。

千夏 どうしたの、大きな声出して。

宇田川 何でもないんです。ちよっと、双子の名前のことで喧嘩になって。

門倉

あらま。気が早いこと。

恵菜

門倉さん、検査はどうだったんですか？

門倉

詳しいことは、後で先生から説明がありますが。

千夏

安心して。どこにも転移はしてなかったって。

恵菜

(門倉に) 本当ですか？

門倉

(Vサイン)

宇田川

よかったですね、お義母さん。よかったな、恵菜ちゃん。

千夏

まひろちゃん、また来てくれたのね。ありがとう。

まひろ

ちよつと寄っただけなんです。お婆さんの顔が見られたから帰ります。

千夏

気をつけてね。

まひろが病室を出る。歩き出す。

三月四日夕。病院前の路上。大志がやってくる。

大志

まひろさん。ちよつと待ってください。

まひろ

何か用ですか。

大志

翻訳の仕事、まだ来てませんか。

まひろ

あんなのが予言ですか？ 弟なんだから、知ってて当然じゃないですか。

大志

姉とは、仕事の話をしたことはありませんよ。会うのは正月ぐらいですし。

まひろ

口では何とでも言えますよね。私には確かめる方法がないんですから。

大志

じゃ、内容を変えます。もうすぐ、あなたのお父さんが、フィンランドの建築学会で表彰されます。去年の秋、ヘルシンキで博物館を設計したでしょう。

まひろ

それが当たったとしても、不思議じゃありません。父は何度も表彰されてま

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

すから。

でも、発表はこれからなんですよ。

だったら、教えてください。地球は、いつ滅亡するんですか。

それは。

どうしたんですか。あなたには、未来がわかるんじゃないんですか。

すべてってわけじゃないんです。わかるものと、わからないものがある。

じゃ、次の総理大臣は？ 東京の次のオリンピック開催地はどこですか？

いや、そんなに一度に聞かれても。

もういいです。どうせ、あなたを信じようとは思いませんから。

あなたは、森岡さんの過去を、どれぐらい知っていますか。

もういいって言ってるでしょう。

聞いてください。これは予言じゃない。既に起きた出来事です。森岡さんは、

7年前、自分で興した会社を潰しています。その結果、1千万もの負債を抱

えた。このことを、森岡さんは話しましたか。

……

その負債は、ご両親が肩代わりをしました。その役目を、今度は、あなたの

お父さんに押しつけようとしているんです。

呆れた。結局、また予言じゃないですか。

すみません。でも、森岡さんに確かめてほしいんです。7年前のことを。

私から聞く気はありません。必要なら、季之さんが話してくれるはずですよ。

そんなことは考えられない。プロポーズまでしたのに、黙ってたんですから。

あなたに何がわかるんです。どこまで私たちが馬鹿にすれば気が済むんです

か。

大志 僕は、ただ、あなたのために。  
まひろ 本当に私のためを思うなら、放っておいてください。

門倉がやってくる。

門倉 天野先生、何やってるんですか。カンファレンスが始まりますよ。  
大志 すみません。今、行きます。

まひろが門倉に会釈をして、去る。

門倉 まひろさんでしたっけ。感じのいい人ですよ。先生と気が合いそう。  
大志 からかうのはやめてください。  
門倉 そんなに怒らなくても。

大志と門倉が去る。



三月十日夕。準備堂書店の休憩室。深見が携帯電話で話している。伝票を持っている。

深見 本当に申し訳ありませんでした。：：いえ、全部、私の責任です。このお詫びは必ず。：：え？ 私は間違いなく深見ですが。：：いつもと口調が違う？ 私は変えたつもりは。：：はい。ごめんください。（電話を切って）参っちやうな、もう。

まひろがやってくる。

まひろ すみませんでした。（頭を下げる）

深見 平気平気。八重洲店と新宿店で、引き取ってもらえることになったから。

まひろ すみません。

深見 いいんだって。それより、珍しいわね。まひろちゃんが発注ミスなんて。前に、公香ちゃんが好きな漫画を百冊、注文したことはあったけど。（伝票を見て）『世界珍獣図鑑』。こんなの、まひろちゃんの趣味じゃないもんね。

まひろ 何か悩みでもあるの？ 僕でよかったら相談に乗るよ。

深見 悩みとかじゃないんです。明日が翻訳の締め切りなので、あまり寝てなくて。だったら、こつちを休めばよかったのに。

まひろ

深見

まひろ

深見

まひろ

深見

まひろ

深見

まひろ

深見

まひろ

深見

まひろ

深見

まひろ

深見

深見が去る。

三月十日夜、まひろ宅。季之がやってくる。

季之  
まひろ

悪かったな、いきなり。夕方、何度かメールしたんだけど。  
ごめんなさい。仕事でバタバタしてたから。どうぞ。

でも、今、人手が足りないじゃないですか。先月も一人、辞めましたし。そうなのよね。本屋って意外と力仕事だから、覚悟がないときついよ。これからは気をつけます。本当にすみませんでした。翻訳が終わったら、うんと羽根を伸ばすのよ。彼氏とおいしいもの食べに行くとか。

でも、忙しい人なので。

例のあれは済んだの？ お嬢さんを、僕にくださいっていう儀式。

それはまだ。

そうなの？ まひろちゃんの彼氏、何て名前だっけ。

森岡季之です。

季之さん、何をグズグズしてるのよ。

私の問題なんです。父に紹介するのは、はっきり結婚するって決めてからに

したいので。

迷ってるわけ？ どうして？

時々、わからなくなるんです。私は季之さんのことを、どこまで知ってるんだらうって。

不安があるなら、正直に言いなさい。人間、正直なのが一番なもの。

季之  
まひろ

(ソファーに座って)お父さんは、まだお仕事？  
うん。今日は遅くなるって。

季之  
まひろ

ますます忙しくなるだろうな。フィンランドで賞を取ったんだろう？  
フィンランドで？

季之  
まひろ

ニュースで流れてただろう。知らなかったのか？  
……。

季之  
まひろ

まひろ？　どうかしたのか？  
何でもない。季之さんはどうしたの？　急に家に来るなんて。

季之  
まひろ

天野って男のことなんだ。直接、まひろに伝えたくて。

季之  
まひろ

何？  
正体は医者だってメールを読んで、驚いてさ。どんな男か知りたくなって、  
経歴を調べてみたんだ。どこかのおぼっちゃんだろうと思ってたけど、真逆  
だったよ。

季之  
まひろ

真逆って？

季之  
まひろ

(携帯電話を操作して)天野が10歳の時、父親が死去。それから、母親  
がパートに出て生計を立てた。金銭的な苦勞もあっただろうな。天野は中学  
時代、かなりの問題児だったらしい。所属してた水泳部の顧問を殴って入院  
させたこともある。

季之  
まひろ

そんなことするような人には見えなかったけど。

季之  
まひろ

高校から、突然、心を入れ替えたみたいだ。現役で、桜花大学の医学部に合  
格。今も大学院に所属している。わかったのはこれだけだ。

季之  
まひろ

それで？　季之さんは何が言いたいのか？  
聞いてなかったのか？　今でこそ医者かもしれないけど、元々は平気で暴力

まひろ  
季之

を振るう男だったんだ。何がきつかけになつて、本来の性格が出てくるかわからない。まひろを傷つける可能性だつてあるんだ。そこまで考えなくてもいいと思うけど。甘いよ、まひろは。何か起きてからじゃ遅い。俺は、もう、まひろと離れていたくないんだよ。

そこへ、明広がやつてくる。

明広  
まひろ

ただいま。

お帰りなさい。

お邪魔してます。こんな時間にすみません。

君が森岡君か。

この度は、受賞、おめでとうございます。

感心しないな。父親の留守中に上がり込むとは。

申し訳ありません。まひろさんと、早急に話し合う必要がありましたので。

君が来たということは、まひろの結論が出たのか。

(まひろに)結論つて。

プロポーズのこと。

何だ、私の早合点か。それなら、私との面談は延期だな。

待っててください。せっかくお会いできたんですから、僕の気持ちだけでも、

聞いてもらえないでしょうか。お願いします。

いいだろう。ただし、五分だけだ。

ありがとうございます。

明広  
季之

明広  
季之

明広  
季之

明広  
まひろ  
明広

まひろ

季之

明広

まひろ

季之

まひろ

自己紹介は省略してくれ。概要はまひろから聞いている。わかりました。僕は欠点だらけの男です。世間体を気にして、つまらない見栄を張ることもありません。だからこそ、まひろさんに支えてほしいんです。君は、まひろに何ができるんだ。まひろさんは、誰に対しても誠実な人です。尊敬できる女性です。そんな人が僕を信じてくれるなら、全力で応えたい。一生を懸けて、まひろさんを守るつもりです。口述試験なら、65点というところだな。それ、ギリギリ合格ってこと？ 私にしては甘い方だ。今度は、まひろの気持ちを聞こう。おまえが結論を出せない理由は何だ。言ったでしょう。知り合ってから、まだ半年しか経ってないから。本当にそれだけか。また何か言われたんじゃないのか。何の話だ。僕を目の敵にしてる男がいるんです。僕たちの結婚を快く思っていない男が。つまり、君のライバルということか。そんなのじゃない。どうなんだ。あいつと会ったのか。会ったよ。季之さんの、昔の話を聞いた。自分で作った会社を潰したって。今度は昔話か。参ったな。本当なの？ ちゃんと話して。日高先生も聞いてもらえますか。身内の恥なので、喜んでというわけにはいかないんです。

明  
季之

明  
季之

ま  
季之

明  
季之

ま  
季之

明  
季之

ま  
季之

前置きはいい。聞かせてくれ。

僕は新潟市の出身で、実家は酒造業を営んでいます。僕が地元の大学を卒業する時、兄から、新しい会社を作るから参加しろと誘われました。もっと商売の規模を広げたい。日本酒を材料にした化粧品や、食品を売りたいと。君からの提案ではなかったのか。

そうです。実家の取引先も協力してくれて、最初は順調だったんです。でも、兄は僕に輪をかけた見栄っ張りです。あるデパートから、全国展開をしないかという話を出されて、過剰な先行投資をしてしまったんです。なのに、その話は実現しなかった。

騙されたってこと？

そうじゃない。兄が先走ったんだ。

君は止めなかったのか。

止められなかったんです。兄は、僕には都合のいい数字しか教えませんでした。結局、会社は3年しかもちませんでした。負債は両親が穴埋めしてくれました。

お兄さんは、今、どうしてるの。

実家を手伝ってる。次期社長として、親父に鍛えられてるよ。

意外だな。経営に関わるなど言われてもよさそうなものだが。

両親とも、長男の兄がかわいくて仕方ないんです。会社が潰れたのは、すべて僕の責任ということになりました。

季之さんは悪くないのに。

でも、兄を止められなかったから。東京に出てくる時、お袋に言われたよ。兄さんを守るために我慢しろ。おまえが泥をかぶれて。

まひろ  
季之  
だから言えなかったの？  
悪かった。でも、一番の理由は、格好つけたかったからだよ。まひろを、が

まひろ  
そんなこと。

明広  
話が済んだなら、そろそろ引き取ってもらえるか。

まひろ  
お父さん。

明広  
どうした。昔話を聞いて、結論を出す気になったのか。

まひろ  
今はまだ。今日中に、仕事を終わらせないと。

季之  
そうか。翻訳の仕事か。メールでしかお祝いを言っていなかったな。

まひろ  
まだ早いよ。長山さんのオツケーをもらってからじゃないと。

季之  
報告を待ってる。(明広に) お邪魔しました。

まひろ  
おやすみなさい。

季之が去る。

明広  
この場で結論を出さなかったのは賢明だったな。慎重に考えた方がいい。

まひろ  
どうして？ 季之さんのこと、気に入らなかったの？

明広  
特に感想はない。今日、会ったばかりで、何かを判断するのは無理だ。

明広が去る。

三月十一日昼。桜花大学付属病院の廊下。恵菜がやってくる。水差しを持っている。

恵那

まひろ。今日は仕事じゃなかったの？

まひろ

事情を話して、半休をもらった。それで、おばさんの手術は終わったの？

恵菜

(俯く)

まひろ

恵菜？ どうしたのよ。ねえ。

恵菜

(顔を上げて) 手術は大成功。30分ぐらいで終わっちゃった。

まひろ

もう。びっくりさせないでよ。おばさんは？

恵菜

まだ寝てる。麻酔は切れたはずだけど、やっぱり疲れたみたいで。

病室。千夏がベッドで寝ている。横に大志と宇田川が立っている。

恵菜

譲君。まひろが来てくれたよ。

宇田川

悪いな、わざわざ。

まひろ

どうして天野先生がいるんですか。

恵菜

どうしてってことはないでしょう。様子を見に来てくれたんだよ。

宇田川

天野先生。さっきの話を、まひろちゃんにもしてもらえますか。

大志

わかりました。(まひろに) 担当の医師によると、腫瘍は完全に切除できた



まひろ

恵菜

大志

まひろ

大志

まひろ

恵菜

まひろ

恵菜

大志

まひろ

恵菜

まひろ

大志

まひろ

恵菜

まひろ

大志

まひろ

宇田川

そうです。今後も継続して検査が必要ですが、遅くても一週間後には退院で  
きます。食事も、明日から普通に摂れるとのことでした。

そうですか。何から何まで。

いいえ。じゃ、僕はそろそろ。

いいんですか。私に聞きたいことがあるんじゃないですか。

ここではちよつと。私は構いませんよ。恵菜にも、宇田川さんにも、聞いてほしいんです。

何かあったの？

昨夜、季之さんが家に来て、お父さんと三人で話をしたんだ。

え？ それじゃ、遂に？

プロポーズを受けたんですか？

ええ。受けるつもりです。

何よ、まだなの？

昨夜は違う話をしてたから。季之さんが、まだ新潟の実家にいた頃の話。

森岡さんは、何て言っていましたか。

あなたが言った通りのことを。でも、大事なところが間違っていました。

大事なところって？

7年前、季之さんは、お兄さんと一緒に会社を作ったの。でも、3年で倒産

したんだ。原因を作ったのはお兄さん。季之さんのせいじゃない。

待ってください。それを鵜呑みにしたんですか。

あなたには関係ないでしょう？

二人とも、声が大きいです。

まひろ

恵菜

まひろ

恵菜

大志

まひろ

宇田川

恵菜

宇田川

恵菜

大志

まひろ

大志

まひろ

恵菜

宇田川

ごめんなさい。

あんたが森岡さんを信じたいののはわかるよ。だからって、天野先生に突っかかるのは違うんじゃない？

仕方ないでしょう。恵菜にとっては信頼できる人かもしれないけど、私は違う。

どうして？ おかしな予言ばかりするから？

（まひろに）僕のこと、話したんですか。

ええ、全部。

（大志に）俺も聞きました。双子のことも当てたって。

それは、たまたまだよ。天野先生は、別に予知能力があるわけじゃない。観察力とか、洞察力とかが、普通の人の何倍も鋭いんだよ。だから、お母さんの病気にも気付けたの。これなら筋が通るでしょう？

なるほど。

どうなんですか、天野先生。

まひろさんが納得できるなら、それでも構いません。

納得なんかできません。私が不幸になるって断言した理由は何ですか。私と

季之さんの、どこを観察して、そう思ったんです？

説明できません。ただ、わかるとしか言えないんです。私たちは放っておいてよ。

やめなよ、まひろ。

天野先生。お義母さんが何か言ってます。

全員がベッドに歩み寄る。千夏が目を開けている。

恵菜

大志

千夏

恵菜

千夏

宇田川

恵菜

大志

お母さん、目が覚めたの？  
気分はどうですか、池沢さん。痛むところはありませんか。

(何か言う)

(耳を寄せて) 何？ もう一度言つて。

(何か言う)

何だつて？

アイスクリームが食べたいつて。

食欲があるなら、一安心ですね。担当を呼んできます。

大志が去る。

まひろ

恵菜

まひろ

恵菜

まひろ

恵菜

まひろ

恵菜

(恵菜に) アイス、買ってこようか。

大丈夫。食事ができるのは明日からだし。

そうか。

それより、さっきの態度は何？ 天野先生に対して失礼だと思わないの？

失礼なのはどっちよ。理由も言わないで、ただ不幸になるって脅かすなんて。

落ち着きなつて。あんたがそんなだから、先生も、ちゃんと説明できないんだよ。

恵菜はどうなの。もし、私と同じこと言われても、冷静でいられる？

いられるよ。ちよつとぐらいの不幸なら、二人で吹き飛ばす自信あるから。

千夏が宇田川に支えられて、上半身を起こす。

千夏 どうしたの、二人とも。

宇田川 何でもないんです。ちよっと、未来予想図について話し合ってます。

恵菜 まひろだって、堂々としてればいいじゃない。森岡さんと絶対、幸せになるって自信を持ちな。そしたら、何を言われても平気なはずだよ。

まひろ 簡単に言わないで。

恵菜 もしかして、自信がないの？ だからあんなに怒ったわけ？ それって、た

まひろ だの八つ当たりだよ。そんなこともわからないの？ やめてよ。いつまでも年上みたいな口きかないで。

まひろが走り去る。

宇田川 まひろちゃん！

恵菜 放っておきなよ。あの子、少し頭を冷やさないと。

千夏 それはあんたも同じでしょう。いい年をして、言っているいいことと悪いことの

区別もつかないんだから。

恵菜 わかっている。今度会ったら、ちゃんと謝る。

三月十一日夕。準備堂書店の休憩室。公香がPOPを描く。菫子がそれを見ている。

菫子 これこれ、このタッチよ。今のくらしもちふさこは、こうでなくちゃ。

公香 くらもち先生のアシスタントは大変だと思えますよ。絵柄が、どんどん進化して

菟子 公香ちゃんがアシスタントをやめたのは何年前？

公香 2年前ですけど。

菟子 もったいないね。戻ってこいって言われない？

公香 ええ、まあ。

菟子 どうしてやめちゃったの？ こんなにコピーがうまい人、なかなかいないのに。

公香 オリジナルが描けなきゃ、意味がないですよ。

そこへ、まひろがやってくる。

まひろ すみません、お待たせして。

菟子 こちらこそ、呼びつけてごめんなさい。本当はお休みだったんでしょ？

まひろ いいんです。予定が変わったので。

公香 私、売り場に戻ります。

公香が去る。

菟子 原稿を受け取りました。お疲れさまでした。

まひろ (頭を下げる)

菟子 では、まず、結論から言いますね。今回の原稿は使えません。

まひろ え？

文章が硬めなのはいいとして、細かい部分に拘り過ぎです。作品の全体像がぼやけて、リズムが感じられないんです。まるで、パソコンの説明書を読ん

まひろ

菫子

まひろ

菫子

まひろ

菫子

まひろ

菫子

まひろ

菫子

まひろ

菫子

でいるようでした。

……はい。

『賢者の贈り物』を読んだ時は、情景が浮かんだんですよね。今回の翻訳はどうでしょうか。

浮かばないと思います。一つ一つの文を、丁寧に訳すことしか考えてなかったの。

やり直す気はありますか。断ってもらっても構いません。この原稿料は、きちんとお支払いしますの。

やりたいです。もう一度、やらせてください。一週間しか待てません。それでもいいですか。

はい。結構です。後で、赤を入れたものをメールで送ります。

よろしくお願いします。お願いします。深見さんから、お見舞いに行ったら聞いてたけど。

お知り合いの方、具合はどうなの。一週間以内に退院できるそうです。

そう。だったら安心ね。長山さん。ちょっと、変なことを聞いてもいいですか。弟さんのことで。

大志の変なこと？ 長山さんは、弟さんに、未来を言い当てられたことがありますか。

え？ ごめんなさい、忘れてください。

そんなの無理よ。私、一度聞いたことは忘れないの。

まひろ  
これだけは忘れてください。あまりに変な話なので。  
もしかして、大志が予言したの？ あなたの未来を。

まひろ  
え？

まひろ  
そうなのね？ どんなことを言われたの？

まひろ  
待ってください。まさか、信じてるんですか？ 予言なんてこと。

まひろ  
そうね。最初は違った。今でも、偶然だったんじゃないかとも思う。

まひろ  
何があっただんですか。教えてください。

まひろ  
私には息子がいるって言ったでしょう。来月、中学生になるんだけど。ちょうど一年前、家族3人で沖縄へ行くことにしたの。そしたら、大志が私の家に来て。

一年前、  
葵子宅。大志がやってくる。

大志  
何度言えばわかるんだよ。沖縄だけはやめてくれって頼んだだろう。

葵子  
だからどうして？ 勇樹だって楽しみにしてるのよ。FC東京のキャンプ場

大志  
が見られるって。

大志  
行ったら、勇樹は二度とサッカーができなくなるんだ。姉さんも義兄さんも、

葵子  
ずっと後悔し続けるんだよ。

大志  
何言ってるの？

大志  
最後まで聞いてくれ。キャンプ場の近くで事故が起きるんだ。工事現場の足

葵子  
場が崩れて、勇樹はその下敷きになって。

大志  
あんた、どうしちゃったの？ 私を脅して楽しい？

大志  
楽しいわけないだろ。僕は姉さんが苦しむ姿なんか見たくない。勇樹が走れ

菟子

大志

菟子

大志

菟子

大志

大志が去る。

なくなるなんて、絶対にあっちゃいけないんだ！

頼むよ、姉さん。一回だけでいいんだ。僕を信じてくれ。（土下座して）何でもするって誓う。だから、頼むから、勇樹を助けて。お願いします。

もうやめて。よくわかったから。

本当に？ 沖繩へは行かない？

約束する。

ありがとう。

まひろ

菟子

まひろ

菟子

まひろ

菟子

まひろ

菟子

まひろ

それで、旅行をやめたんですか。

息子には恨まれたけどね。大志が予言した事故は本当に起こった。私たちが

行くはずだった日に。あ、怪我人はいなかったから安心して。

他に、予言が当たったことはあるんでしょうか。

私が経験したのは一回だけ。

そうですか。

あなたは、どんなことを言われたの？

結婚のことです。やめた方がいいって。

そう。そんな大事なことを。ごめんなさい、私は何もコメントできない。

大丈夫です。自分の頭で考えますから。

菟子が去る。



三月十一日夜。まひろ宅。明広がやってくる。

明広 ただいま。

まひろが明広に歩み寄る。

まひろ お帰りなさい。また生徒さんと食事してきたの？

明広 話したいことがある。そこに座りなさい。

まひろ 何？

明広 森岡君には、もう返事をしたのか。

まひろ まだよ。慎重に考えろって言ったのは、お父さんでしょう。

明広 しかし、おまえは結論を出したと聞いたぞ。

まひろ 誰に？

明広 天野大志君だ。夕方、大学に私を訪ねてきた。

まひろ あの人？ どうして？

三月十一日夕。明広が勤める大学の廊下。大志がやってくる。

大志 明広 大志 明広 大志 明広 大志 明広 大志 明広 大志 明広 大志 明広 大志 明広

日高先生。突然すみません。お願いしたいことがあつて参りました。君か。久しぶりだな。

僕のこと、ご存じなんですか。

私の目が節穴だと思つていいのか。君の姿は十年近く、あちこちのイベントで見かけている。何度か、大学の授業にも潜り込んでいただろう。

すみません。それもバレていたんですね。

仕事は何をしている。建築関係か。

違います。他にやりたいことがあつたので。

だったら、なぜ、私の講義を受けた。

僕は大志といひます。天野修一郎の息子です。

何だつて。

父の葬儀では、大変、お世話になりました。あの時から、いつか、先生の授業を受けたいと思つていました。だから、大学にもお邪魔したんです。

そうか。君が修一郎の。

先生のお話は、父からよく聞いていました。大学の時、同じ下宿に住んでいたそうですね。

ああ。私は研究に夢中になると、つい食事を忘れてしまう。修一郎が叱りつけて、二人で台所に立ったんだ。

父が料理を？ 家ではそんなこと、一度もなかったですよ。

ほとんどが鍋だ。野菜を切つて、安い肉と煮るだけ。しかし、あんなにうまい鍋は、あれから食つたことがない。

単に、お腹が空いてたからじゃないですか。

かもしれんな。それで、今は何をしている。

大志

医師です。桜花大学の付属病院で働いています。

明広

そうか。立派になったな。お母さんは。お姉さんも息災か。

大志

はい。母は相変わらず、働きに出ています。姉は出版社に勤めていて、息子が今度、中学生になります。

明広

そうか。修一郎も喜んでるだろう。あいつに見せたかった。今の君を。

まひろ

それで？ 頼みたいことって何だったの？

明広

おまえの結婚を止めてくれと言われた。森岡君は、おまえを欺いていると。

まひろ

信じられない。まだそんなこと。

大志

（封筒を取り出して）真実は、ここに書いてある通りなんです。まひろさん

明広

にも、そう伝えてください。

大志

（受け取って）君の話はわかった。しかし、なぜここまでする。まひろとは、

大志

十日前に会ったばかりなんだろう。まひろさんの幸せが、先生の幸せだと思うからです。失礼します。

大志

（受け取って）君の話はわかった。しかし、なぜここまでする。まひろとは、

大志

（受け取って）君の話はわかった。しかし、なぜここまでする。まひろとは、

大志

（受け取って）君の話はわかった。しかし、なぜここまでする。まひろとは、

大志

（受け取って）君の話はわかった。しかし、なぜここまでする。まひろとは、

大志

（受け取って）君の話はわかった。しかし、なぜここまでする。まひろとは、

大志

（受け取って）君の話はわかった。しかし、なぜここまでする。まひろとは、

大志

（受け取って）君の話はわかった。しかし、なぜここまでする。まひろとは、

大志

（受け取って）君の話はわかった。しかし、なぜここまでする。まひろとは、

大志

（受け取って）君の話はわかった。しかし、なぜここまでする。まひろとは、

大志

（受け取って）君の話はわかった。しかし、なぜここまでする。まひろとは、

大志

（受け取って）君の話はわかった。しかし、なぜここまでする。まひろとは、

大志

（受け取って）君の話はわかった。しかし、なぜここまでする。まひろとは、

大志

（受け取って）君の話はわかった。しかし、なぜここまでする。まひろとは、

大志

（受け取って）君の話はわかった。しかし、なぜここまでする。まひろとは、

大志

（受け取って）君の話はわかった。しかし、なぜここまでする。まひろとは、

ここまで図々しい人だとは思わなかった。お父さんまで巻き込むなんて。（紙を差し出して）見てみる。7年前、森岡君のお兄さんが作ったという会社の登記情報、つまり登記簿の写しだ。  
（受け取り）登記簿？ 「（読む）閉鎖事項証明書」。  
事業内容は、森岡君から聞いた通りだ。しかし、重大な違いが1つある。代表取締役、つまり経営者は森岡君本人だということだ。  
それは、ご両親がそうしろって言ったからでしょう。全部、季之さんの責任

明広

にしろって。  
森岡君の説明を信じるなら、会社を設立した時点では、お兄さんが代表だったはずだ。代表取締役が交替した場合、登記簿に記載されていなければおかしい。しかし、そこには、そんな記載はどこにも見当たらない。

まひろ

季之さんが嘘をついてるって言いたいの？

明広

その可能性が高いと言っている。私は森岡君の言い分を支持することはできない。おまえも、今一度、結論を見直すべきだ。

まひろ

私は季之さんを信じてる。それだけじゃ駄目なの？

明広

少しは冷静になったらどうだ。客観的に、事実だけを検討するんだ。

まひろ

何が事実よ。(コピーを示して)これが本物だって証拠はあるの？ 知り合

明広

いの息子だからって、どうしてあんな人の言うことを聞くのよ。

まひろ

おまえの幸せを望んでいるからだ。それ以外に理由はない。

明広

私の幸せって？ お父さんは、私がどうなれば幸せだって言うの？

まひろ

おまえが、悔やむことのない生き方をすることだ。

後悔なんかしない。自分で選んだことなら、どんな結果でも、ちゃんと引き受ける。

明広  
まひろ

私はおまえが傷つくのを見たくない。平穏な日々を送ってほしいんだ。一度も傷つかない生き方なんてある？ そんなの、何もするなって言ってるのと同じじゃない。

明広

進んで困難な道を選ぶことはないと言ってるんだ。

まひろ

勝手に決めつけないで。私が幸せだって思えば、それでいいでしょう。

明広

まひろ。

まひろ

私はもう子供じゃない。どう生きるかは自分で決めるから。

まひろが歩き出す。明広が去る。  
三月十一日夜、季之宅。季之がやってくる。

季之

それで飛び出してきたのか。親子喧嘩で家出なんて、まだ子供だって証拠じゃないかな。

まひろ

季之さんは腹が立たないの？ 頭から嘘だって決めつけられて。

まひろ

いや、俺が悪い。俺の説明が足りなかった。

季之

会社を立ち上げる時、兄貴は親父から条件を出されたんだ。「表向きは、季之が社長だつてことにしろ」って。親父は、うまくいくとは思ってなかったんだな。最初から、俺に責任を取らせるつもりだったんだ。

まひろ

そんな条件、よくお兄さんがオツケしたね。

季之

怖かったんだよ、親父が。兄貴としては、新しい商売ができるなら、自分が社長じゃなくても構わなかったんだ。

まひろ

だから、全部、季之さんのせいになつても黙ってたの？

季之

そうするしかなかったんだよ。会社を作ろうとしたのは、親に対する、兄貴の精一杯の反抗だった。それが失敗して、尻拭いまでしてもらったんだから。

まひろ

すごいね、季之さんは。私だったら、そんなふうには納得できない。

季之

それにしても、天野ってヤツは執念深いな。登記簿まで引つ張り出すなんて。

まひろ

何が何でも、私たちを結婚させたくないみたい。どんなに邪魔しても、私の

まひろ

気持ちが変わらないのに。

季之

どういう気持ちだ？

季之

どういう気持ちだ？

まひろ  
季之

私も、季之さんのそばにいたいので。プロポーズをお受けします。ちよっと待ってくれ。まひろは、お父さんに反対されて、意地になってるだけじゃないのか。

まひろ  
季之  
まひろ

反対されて、よくわかったの。私は、季之さんと幸せになりたいんだって。不安じゃないのか。俺は二回も嘘をついたんだぞ。でも、ちゃんと謝ってくれたから。事情もよくわかったし。それに、三度目の正直って言うでしょう。

季之

信じてくれるのか。こんな俺を。

まひろ

季之さんが私でいいなら。

季之

言っただろう。俺には、まひろしかいない。

まひろ

ありがとう。

季之

俺の方こそ。そろそろ帰った方がいい。お父さん、きっと心配してるだろう。

まひろ

死ぬほど心配すればいいと思う。

季之

そんなこと言うなよ。家まで送るよ。

まひろ

大丈夫。季之さん、まだ仕事が残ってるんでしょ？

季之

じゃ、下でタクシーを拾おう。

まひろと季之が去る。

三月十六日昼。桜花大学付属病院のロビー。恵菜・宇田川・千夏・門倉がやってくる。

門倉 忘れ物はないですか。

千夏 大丈夫です。本当にお世話になりました。

恵那 門倉さん、天野先生はお忙しいんでしょうか。ご挨拶がしたいんですが。

門倉 先生は今、ミーティング中なんです。引き継ぎのことで。

宇田川

門倉 来月から、シカゴの医科大学へ移るでしょう。ご存じなかったんですか。

そこへ、大志がやってくる。

大志 よかった、間に合った。

門倉 あらま。噂をすれば影です。ね。(千夏に) それじゃ、次の検診で。

千夏 ありがとうございます。

門倉が去る。

大志 (千夏に) 退院おめでとうございます。

千夏

大志

大志

大志

大志

大志

大志

大志

大志

大志

大志

大志

大志

大志

大志

大志

大志

大志

大志

大志

大志

大志

もうお会いできないのかと思ってきました。昨日も一昨日も、病室にいらっしやらなかつたから。

すみません。今、抱えてる研究が佳境に入ってます。

天野先生。来月からシカゴへ行くって、本当ですか。

ええ、まあ。すみません、あんまりゆつくりできないんですよ。すぐに午後

の診察が始まりますので。

恵菜ちゃん。先生に伝えることがあるんじゃないのか。

僕にですか。何でしょう。

まひろからの伝言です。もう心配はいりません、私のことは忘れてください。

え？

まひろは森岡さんと結婚するって決めたんです。来月、身内だけで式を挙げ

るって。

来月？

ずいぶん急なのね。今から取れる式場なんてあるの？

一つだけ見つかったんだって。今日、仕事の後、二人で下見に行くみたい。

本来に来月って言ってましたか。間違いありませんか。

もう、止めても無駄だと思いますよ。まひろは、一度決めたことは絶対にや

り通す子だから。

俺もそう思います。でも、先生が諦めないって言うなら応援しますよ。

譲君、何言ってるの？

先生は、まひろちゃんのことを好きなんですよね？ だったら、せめて、気

持ちだけでも伝えるべきだと俺は思う。

僕の気持ちはどうでもいいんです。まひろさんが幸せになつてくれれば。



宇田川  
大志

やっぱり好きなんじゃないですか。  
宇田川さん。恵菜さん、千夏おばさんと日高先生のこと、よろしく願います。

大志が去る。

恵菜

譲君、無責任なこと言わないでよ。せつかくまひろが決心したのに、揉め事なんてイヤだよ、私。

宇田川

それより、今のは何だ？ 天野先生、お義母さんのことを「千夏おばさん」

千夏

って呼ばなかったか？  
やっぱり、先生だったのかしら。

宇田川

何がですか？  
天野先生とは、どこかで一度、会ったような気がしてたの。まひろちゃんの

宇田川

お母さんのお葬式だったのよ。  
それって、15年も前の話ですよね？

千夏

私は受付にいたんだけど。中学生ぐらいの男の子が、ずっと、会場の外に立

恵菜

つてて。「中へどうぞ」って声をかけたら、「日高先生とまひろさんのこと、よろしく願います」って。それだけ言って、いなくなっただの。

千夏

それが天野先生だっていうの？ そんなことってある？  
わからない。でも、目がよく似てるのよ。真剣な目が。

恵菜・宇田川・千夏が去る。  
三月十六日夕。弥生書店の休憩室。まひろが奥から出てくる。公香がやってくる。

まひろ お疲れさまです。  
公香 あれ。まひろさん、今日は早く帰るって言ってませんでした？  
まひろ そうなんだけど、在庫整理が終わらなくて。  
公香 そんなの、深見さんにやらせればいいのに。

そこへ、大志と深見がやってくる。

深見 よかった。まひろちゃん、まだいた。お客さんよ。  
まひろ 天野先生。

深見 先生？こちら、小説家の方？  
まひろ 違います。恵菜のお母さんがお世話になったお医者さんで。  
深見 つまり、宇田川さんの義理のお母さんがお世話になったのね？ だったら、

大志 僕からも、お礼を言わなくちゃ。  
まひろ いいんです、お礼なんて。  
大志 私、急いでますので、失礼します。

大志 恵菜さんから伝言を聞きました。今のままでは、あなたを忘れることはできません。あなたが考えを変えない限り。  
まひろ 何度言えばわかるの。私がどうなっても、あなたには関係ないでしょう。  
公香 どういうことですか？ その人、まひろさんとどんな関係なんですか？

深見 公香ちゃん、横から口出ししちゃ駄目よ。  
大志 (まひろに) あなたは、いつ、森岡さんのご両親に会うんですか。  
まひろ 何なんですか、いきなり。

大志

答えてください。来月、結婚式を挙げるんでしょう。だったら、その前に、実家に行こうという話が出たんじゃないですか。

公香

来月？ もうそんなに話が進んでるんですか？

大志

どうなんですか、まひろさん。

大志

私に答える義務はありません。

まひろ

森岡さんは、あなたを新潟に連れていこうとは思いません。7年前に、

まひろ

ご両親に勘当されてるんですから。

大志

そんなわけないでしょう。季之さんは、お兄さんの代わりに責任を取って、

まひろ

森岡さんに頼んでみてください。ご両親に会わせてくれと。

深見

お断りします。

まひろ

どうして？ 何か頼めない事情でもあるの？

深見

この人が言ってることがデタラメだからです。

まひろ

そんな理由にならないわよ。まひろちゃん、ご両親に会いたくないの？

深見

もちろん会いたいです。でも、季之さんが忙しいので。

まひろ

それも理由にならない。時間がなければいいの。僕だって、妻の実家は北海道だけど、日帰りで挨拶に行った。とっってもいいご両親だった。この

公香

人たちのために、妻を幸せにするぞって思ったの。

深見

深見さん、話が長い。

まひろの携帯が鳴る。まひろが電話に出る。遠くに季之が現れる。

まひろ

もしもし。

季之

まひろ。どうしたんだよ。もう約束の時間だぞ。

まひろ  
季之  
何だ。こっちは急いで終わらせたのに。

まひろ  
季之  
季之さん。お願いがあるんだけど。

まひろ  
季之  
何だよ。ドタキャンなんてやめてくれよ。

まひろ  
季之  
そうじゃなくて。式の前に、季之さんの実家に連れて行ってほしいの。

まひろ  
季之  
そんな時間があると思うか？ 挨拶は当日でいいって言っただろう。

まひろ  
季之  
本当に、ご両親に話をしたの？ 式に出てくれるの？

まひろ  
季之  
なんでそんなこと聞くんだよ。またあいつに何か言われたのか。俺を信じる

まひろ  
季之  
んじゃなかったのか。

まひろ  
季之  
信じたいと思ってるよ。だから、ちゃんと答えて。

まひろ  
季之  
わかったよ。そんなに気になるなら、連れていくよ。俺はいつでもいいぞ。

まひろ  
季之  
早い方がいいなら、これからでも。

まひろ  
季之  
これから？

まひろ  
季之  
まひろは今、吉祥寺だよな。じゃ、電車は無理かもしれない。夜行バスの時

まひろ  
季之  
間を調べてメールする。

まひろ  
季之  
待って。本当に連れていってくれるの？

まひろ  
季之  
まひろはそうしたいんだろう？ だったら俺に文句はないよ。じゃ、後で。

季之が去る。

大志  
まひろ  
大志

今、これからって言いましたか。  
ええ。あなたの予言も、外れることがあるんですね。  
いや、これは予言じゃなくて。

まひろ

深見さん。明日、お休みをもらってもいいでしょうか。

深見  
まひろ

いいわよ、もちろん。  
ありがとうございます。失礼します。

まひろが去る。

深見

(大志に) 何、ボートとしてるの。早く追いかけないと。

大志

失礼します。

大志が去る。

深見

頑張って!

公香

どういう状況なんですか、今の。深見さんにはわかったんですか。

公香

わかるわけないでしょう。  
じゃ、何で追いかけるなんて。

深見

男の勘よ。そうするべきだって思ったの。

深見と公香が去る。

三月十六日夜。新宿駅西口の路上。まひろがやってくる。後を追って、大志がやってくる。

まひろ

いつまでついてくるつもりですか。

大志

もう10時を過ぎてますから。女性を一人にしておくわけにはいきません。

まひろ

一人じゃありません。もうすぐ季之さんが来ますから。

大志

どうして来月なんですか。

まひろ

え？

大志

結婚式です。本当は、式を挙げるなら、あなたのご両親の結婚記念日。10

まひろ

月1日にしたいと思っただけじゃないですか。

まひろ

どうして知ってるんですか。

そこへ、季之がやってくる。

季之

あんたが天野さんか。ちょうどよかった。一度、話をしたいと思ってたんだ。

大志

僕もです。

季之

あんたの目的は何だ。何のために、まひろにつきまとう。

大志

僕は、まひろさんの幸せを願っているだけです。

まひろ

あなたには関係ないって言ってるでしょう。

まひろは黙っててくれ。

森岡さん。あなたが、今の会社をやめる本当の理由は何ですか。

季之 本当の理由？

大志 独立したいというのは表向きで、会社に残りたくない事情があるんじゃないですか。

季之 何の話だ？ あんたの妄想か？

大志 妄想ではなく、事実に基づく推測です。あなたは、何らかの方法で、会社の

金を横領した。それが明らかになる前に、退職しようとしているんです。

季之 (まひろに) いつもこんな調子なのか？

大志 あなたは、いずれ、日高先生に借金を申し込むつもりでしょう。先生しか、

季之 頼る相手がいないからです。

大志 ずいぶんな言いがかりをつけてくれるじゃないか。大体、何で俺が横領なん

季之 かしなくちゃいけないんだ？

大志 それは、あなたが一番よくわかっているはずですよ。

季之 してもいいことがわかるわけないだろう。

大志 残念ですが、日高先生は当てにできませんよ。僕が話をしますから。もし、

季之 森岡さんに借金を頼まれても断ってくださいと。

季之 おい！

季之が大志の胸倉を掴む。

まひろ

季之さん、やめて。

季之

大志

季之

大志

季之

季之が大志を殴る。大志が倒れる。

まひろ

季之

大志

季之

まひろ

季之

まひろ

（大志に）いい加減に諦めろ。俺の悪口を吹き込んだぐらいで、まひろがおまえを相手にすると思うのか。

思いません。だから正直に言ってください。勘当されてるから、実家には行けないって。

何だと？

本当は、まひろさんを連れていく気なんかないんでしょう。どうやってごまかすか、必死で考えてるんですよね。

ふざけるな！

天野さん！（大志に駆け寄って）大丈夫ですか。

そんなヤツ、放っておけばいい。帰ろう。

悪い。そんな気分じゃなくなつた。

だったら、せめて、電話をしてください。まひろさんに、ご両親と話をさせるんです。

あんたに指図される覚えはない。私からもお願い。電話をかけて。今、ここで。

季之さんがかけたくないなら、私がかける。番号を教えてください。

どうしてそんなに拘るんだ。俺を信じるんじゃないのか。



季之 まひろはお父さんに話をしたのか。俺との結婚、ちゃんと許可をもらったのか。

まひろ それは……。

大志 日高先生に話してないんですか？

季之 (まひろに) だったら二人で帰ろう。俺も頭を下げるから。

まひろ 無理よ。天野さんを放っておけない。

季之 まひろ。

まひろ 今日は帰って。一人で考えさせて。お願いだから。

季之 わかったよ。

季之が去る。

まひろ あなたが言ったことが本当だったんですね。季之さんは、ご両親に縁を切られた。だから電話もできなかった。そうなんですね。

大志 ええ。わかりません。どうして話してくれなかったのか。

大志 森岡さんは、誰にも弱みを見せたくないんです。それを避けるためなら、平気で嘘もつく。森岡さんにとって、嘘は自分を守る手段なんだと思います。

まひろ 私より、天野さんの方が、季之さんをよく知ってるみたい。

大志 そうかもしれない。

まひろ 私、ちゃんと見てなかったんですね。季之さんのこと。情けないです。

大志 自分を責めることはありませんよ。

まひろ 明日、もう一度、季之さんと話をします。うまく話せるかどうかかわからない

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

まひろ

大志

けど、このまま終わりにしたくないので。待ってください。あなたには、何もわかってない。森岡さんとは、もう会うべきじゃない。違う人生を選ばなきゃ駄目なんです。

違う人生？

僕が森岡さんをよく知っているのは当たり前です。今のあなたより、ずっと長く、森岡さんを見てきましたから。

何を言ってるんですか？

僕は未来がわかるわけじゃない。二度目の人生を生きているんです。

二度目？

一度目の人生は35歳で途切れました。ある日、突然、時間が巻き戻ったんです。気付くと、僕は15歳になっていた。一瞬で、20年分の人生が消え

たんです。

冗談ですか。僕だって、最初は冗談かと思いましたが。夢でも見てるのかと。でも、これは現実に起きたことなんです。僕は去年、30歳になりました。つまり、今から5年先までに起きる出来事を、既に一度、経験しているんです。

信じられませんか。予知能力の方が、まだマシです。

信じるかどうかは、僕の話聞いてからにしてもらえませんか。

話って？

僕の一度目の人生です。僕は、中学の時、水泳部でした。2年生の春に、自転車転んで肩を脱臼して。練習をサボるようになって、注意した顧問を殴って大怪我をさせて。それで弾みがついて、外でも喧嘩を繰り返すようになったんです。

まひろ  
大志

まひろ  
大志

明広  
がやってくる。

問題児だったってことは聞きました。  
問題児どころじゃありません。高1の時、新宿で酔っ払いと喧嘩になって。  
相手は3人いたんですが、そのうちの1人に入院するほどの怪我を負わせて  
しまいました。さすがに警察沙汰になって、少年院に三カ月入りしました。  
ちよつと待ってください。高校では優等生じゃなかったんですか。  
それは二度目の人生です。一度目では、すぐに退学になりました。そして、  
少年院を出た後、あなたのお父さんが僕に会いに来たんです。  
明広  
思ったより元気そうじゃないか。これなら明日から働けるな。  
大志  
何だよ、働くって。  
明広  
高校はやめたんだらう。時間だけは、たっぷりあるはずだ。  
大志  
放っとけよ。  
明広  
そういうわけにはいかない。君は修一郎の忘れ形見だ。とことんまで面倒を  
見てやるから覚悟しろ。明日の朝、7時に汐留駅で待っている。  
大志  
（まひろに）翌日、僕は昼過ぎまで寝ていました。すると夕方、先生が来て。  
明広  
明日の朝、7時に汐留駅で待っている。  
大志  
それだけ言って帰りました。次の日も、そのまた次の日も。一週間後、根負  
明広  
けした僕が汐留駅に行く、すぐに建築現場に連れていかれました。  
大志  
そのへんに座っている。今日は見学だけでいい。  
明広  
（まひろに）嘘でした。現場監督が僕を捕まえて、資材運びをやらされました。

明広  
しつかりやれ。

明広が去る。

大志  
それから他の現場でも働くようになって、19の時に、先生の紹介で工務店

に就職しました。先生が就職祝いをしてくれて、そこで初めてまひろさんに  
会ったんです。

まひろ  
私はいくつだったんですか。

大志  
16歳。高校2年でした。その時は、恵菜さんのお母さんが料理を作ってく  
れたんです。

千夏がやってくる。

千夏  
男の子なのに、洗い物をしてくれるなんて偉いわ。ねえ、まひろちゃん。

大志  
お二人に、話しておきたいことがあるんです。

千夏  
何？

大志  
俺、少年院にいたんです。16の時。喧嘩で、相手に大怪我をさせて。

千夏  
そう。

大志  
驚かないんですか。

千夏  
驚いた方がよかったです。今も喧嘩することあるの？

大志  
そんな気になれないです。毎日を動かしてるし、日高先生に迷惑をかけた  
くないので。

千夏  
(まひろを見て) そうそう、まひろちゃんの言う通りよ。この話はおしまい。

(大志に) 今度は何が食べたいか、考えておいて。

千夏が去る。

大志

それから、年に何度か、家に呼んでもらって。あなたの手料理をご馳走に  
なったこともあります。恵菜さんや、僕の姉が一緒だったことも。そして、  
僕は30歳で、一級建築士の試験に合格しました。

明広・恵菜・宇田川・千夏・菟子がやってくる。

恵菜

菟子

明広

明広

千夏

宇田川

大志

明広

恵菜

恵菜

おめでとう、大志さん。一級建築士の試験って、難しいんでしょう？  
難しいなんてもんじゃないのよ。毎年、合格率は一割ぐらいだから。  
正確には、一割二分から三分だ。いずれにせよ、よく頑張ったな。  
大志が頑張れたのは、先生のおかげだと思います。ありがとうございます。  
礼を言われるようなことはしていない。  
(大志に) 今日、まひろちゃんがおでんを作ったのよ。  
え？ お祝いにおでんですか？  
僕の大好物なんです。大根が最高にうまいんですよ。  
同感だ。  
ねえ、まひろ。まひろからも報告があるんだよね？

全員がまひろを見る。

まひろ 何？私、何を報告したんですか？  
大志 結婚ですよ。森岡さんの。

明広・恵菜・宇田川・千夏が口々に、「おめでとう」とまひろに言う。

大志 大志。あんたはこれでいいの？

大志 ああ。まひろちゃんが幸せなら。

大志 ほんと、余計なことしたわね、あんたも。

大志 大志くん、葵子さん。みんなで乾杯しましょう。

明広・恵菜・宇田川・千夏・葵子が去る。

まひろ 天野さんは、みんなと仲がよかったですね。

大志 一度目の人生では。違っているのはこれだけじゃありません。あなたと森岡

さんを出会わせしたのは、僕だったんです。

まひろ そうなんですか？

大志 僕は森岡さんの会社へ、改装工事の仕事で通っていました。

季之がやってくる。

季之 （大志に）ちよつとすみません。あなたの会社に、将棋に詳しい人はいませ

大志 んか。仕事で覚えなきゃいけないくて。

大志 僕のところにはちよつと。そういう本を探したらどうですか。

季之 それもそうですね。これから吉祥寺に行くんで、本屋を覗いてみます。  
大志 それなら、準備堂書店に行ったらどうですか。あそこは店員が親切ですよ。  
季之 本当ですか。じゃ、行ってみます。

季之が去る。

大志 僕は、二度目の人生ではあなたに会わなかった。森岡さんにも会わなかった。

まひろ だから、安心していたんです。二人が会うことはない。

大志 私は、いつ結婚したんですか。やっぱり、27歳の四月ですか。

まひろ いいえ。一度目では、10月1日だったんです。

大志 お父さんとお母さんの、結婚記念日。

大志 森岡さんが会社を立ち上げたのも同じ頃です。

大志 深見・公香がやってくる。

大志 深見

大志 公香 (まひろに) 寂しくなるけど、仕方ないわね。おめでたいことだもの。  
大志 深見 まひろさん、翻訳は続けるんでしょう？  
大志 深見 無理しちゃ駄目よ。どんな時でも、ちゃんと食べて、ちゃんと寝なさいね。

大志 深見・公香が去る。

大志 まひろ 私、準備堂を辞めたんですね。

大志 森岡さんが、会社を手伝ってくれと言ったんです。森岡さんが作ったのは、

まひろ  
外資系の企業に向けたマーケティングの会社でした。  
季之さんの夢が叶ったんですね。  
大志  
独立に当たって、森岡さんは、日高先生に出資を頼みました。

明広と季之がやってくる。

明広  
出資？ 私に金を出せということか。  
季之  
申し訳ありません。僕が浅はかでした。当てにしていた会社の経営が傾いて  
しまっています。

明広  
それで株に手を出したというわけか。  
季之  
申し訳ありません。

明広  
（まひろを見て）おまえが頭を下げることはない。これは森岡君の問題だ。  
季之  
お義父さん。どうか、お力添えをお願いします。

明広  
ついてきなさい。  
季之  
ありがとうございます。

明広と季之が去る。

大志  
（まひろに）会社の経営は、最初のうちは順調でした。まひろさんも、翻訳  
の仕事が増えていきました。森岡さんは、業界のトップを目指すと豪語して

まひろ  
いました。手を広げ過ぎたのが災いして。経営が危なくなると、先生に出  
資を頼みました。4年間で3回。合計で五千万。  
五千万？



大志 三回とも、あなたが頼み込んだんです。だから、先生も断れなかったんだと思います。

菟子がやってくる。

菟子 (まひろに) 大丈夫、まひろさん？ また胃が痛むの？

大志 (まひろに) あなたは、少しずつ、体調を崩していききました。

菟子 余計なお世話かもしれないけど。森岡さんには、違う人を雇ってもらったら

どうか。向こうの仕事も忙しいんでしょ？ これ以上、両立は無理よ。

まひろさん、聞いてる？ まひろさん？

大志 あなたは倒れて、病院に運ばれました。胃潰瘍を発症していたんです。

門倉がやってくる。

門倉 (菟子に) 極度のストレスが原因だと思います。しばらく、お仕事は控えた

方がいいでしょうね。

門倉が去る。

大志 (まひろに) そして、あなたはどちらの仕事も休むことになりました。

菟子 悔しいな。もっと一緒にやりたかったのに。

菟子が去る。

まひろ　私が翻訳を諦めたんですか。不幸って、このことだったんですか。  
大志　いいえ。まだ続きがあるんです。

宇田川と恵菜がやってくる。

宇田川

悪いな、急に呼び出して。

大志

いいえ。何かあったんですか。

恵菜

まひろのことなの。昨日も家に行ったんだけど、森岡さん、帰ってなくて。

大志

そんなに忙しいのか。

恵菜

それだけじゃないのよ。森岡さん、まひろの代わりに雇った女のマンション

宇田川

に入り浸ってるみたいなの。譲君が、二人が一緒にいるところを見かけて。

大志

イヤな予感がして、ちよつと調べてみたんだ。そしたら、そのマンションを

宇田川

借りてるのは森岡さんだった。よくそんな余裕があると思うよ。

大志

余裕って。

宇田川

会社がうまくいってないらしい。だからって、浮気していいことにはならな

恵菜

いだろう。

大志さんも、まひろの様子、見に行つてあげて。大志さんと話せば、元気が  
出ると思うし。今の話は言わないでね。

宇田川と恵菜が去る。

まひろ

本当ですか。本当に、季之さんが私を裏切るんですか。

大志　ええ。  
まひろ　私はずっと知らないままなんですか。  
大志　それどころじゃなかったんですよ。同じ頃に、日高先生が入院したので。  
まひろ　お父さんが？　どうしてですか？

千夏がやってくる。パジャマを着ている。

千夏　（大志に）日高さん、心臓がよくないみたいなの。でも、一週間ぐらい入院して、安静にしてれば治るんだって。  
大志　お婆さんは。体の具合はどうなんですか。  
千夏　まあまああってところかな。いつもありがとう。お見舞いに来てくれて。

千夏が去る。

まひろ　どういうことですか。お婆さんの手術は成功したんじゃないんですか。  
大志　一度目の人生では、ガンの発見が遅れたんです。手術は大きかりなものになりました。腫瘍は切除できましたが、直後に転移が見つかった。治療のために、入院と退院を繰り返しているんです。  
まひろ　そんな。  
大志　そして、あなたと森岡さんが結婚してから、4年目の春。

明広がやってくる。パジャマにガウンを羽織っている。

明広

悪かったな。心配をかけて。

大志

大丈夫なんですか。歩き回ったりして。

明広

今日は調子がいいんだ。それより、君の耳に入れておきたいことがある。

大志

はい。

明広

まひろが家に戻ってきた。離婚も時間の問題らしい。

大志

そうですか。

明広

驚かないのか。

大志

先週、まひろちゃんと食事をしたんです。恵菜ちゃんも一緒に。

明広

まひろはちゃんと食べていたか。

大志

いえ、あまり。また機会を見つけて、食事に誘いますから。

明広

大志君。私は、君がまひろと一緒にいるものだと思っていたんだ。

大志

僕にできることがあったら言ってください。

明広

まひろの力になってやってくれ。この通りだ。(頭を下げる)

明広が去る。

まひろ

全然、実感が湧きません。まだ結婚もしてないのに、離婚なんて。

大志

日高先生の入院は長引きました。あなたも胃が完全に治っていなかったの、十分に働くことができませんでした。

恵菜がやってくる。

恵菜

大志さん、知ってた？ まひろ、まだ離婚してないんだって。

大志

恵菜

大志

恵菜

大志

恵菜

大志

恵菜

恵菜が去る。

まひろ

大志

嘘だろう？ 離婚届を渡したんじゃないのか？  
森岡さんが渋ってるみたい。  
どうして？  
怖いんじゃないかな。まひろのお父さんが出したお金を返せって言われるのが。私は裁判にすればって言ったんだけど。まひろ、そんなお金も体力もないって。  
そうか。先生の入院費も、かなりかかっているみたいだな。  
私、もう見てられない。元氣そうにしてるけど、全然、寝てないのがわかるんだもの。大志さん、何とかしてあげてよ。  
わかった。貯金なら少しはあるし。  
そういうことじゃないよ。わかっているくせに。

それで？ どうなったんですか？  
今から5年後の、3月30日。僕は先生の病室へ行こうとして、近くの交差点であなたを見かけました。あなたは病院から帰る途中で、俯いたまま歩いていました。何か考え事をしてるようで、僕が道路の反対側から呼びかけても、まったく気付かないんです。やがて、歩行者用の信号が点滅して、赤になった。なのに、あなたは、そのまま。

車のクラクションの音。

まひろ

：：車にはねられたんですか。

大志

ええ。あなたがどうなったのかは、わからないままです。事故を見た1秒後には、15歳に戻っていたので。

まひろ

そうですか。

大志

僕には何もできませんでした。ずっとあなたのそばにいたのに。あなたが不幸になつていくのを、ただ見ているだけだったんです。

まひろ

だから、違う人生を選べと言ったんですね。

大志

今度こそ、幸せになつてほしいんです。日高先生にも、あなたにも。

まひろの携帯が鳴る。まひろが電話に出る。遠くに明広が見れる。

まひろ

もしもし、お父さん？ どうしたの？

明広

それは私のセリフだ。おまえ、今、どこにいる。

まひろ

新宿の西口。これから帰るところ。

明広

急いでくれ。森岡君が来ている。

まひろ

え？

まひろが電話を切る。

三月十六日夜、まひろ宅。季之がやってくる。まひろと大志が明広に歩み寄る。

季之 (まひろに) 驚いたな。まだ天野さんと一緒だったのか。

まひろ 季之さんは何をしに来たの？

季之 決まってるだろう。お父さんに、許可をもらいに来たんだよ。

明広 (まひろに) 式の日取りまで決めたというのは本当なのか。

まひろ ごめんなさい。

季之 天野さんは引き取ってもらえますか。これは俺たちの問題なんだから。

明広 大志君にも立ち会ってもらいたい。教えてくれないか。君はなぜ、自分がし

季之 たことを認めなかった。

季之 兄の会社のことを仰ってるんですか。あれには事情があつたんです。まひろ

まひろ さんには納得してもらいました。

季之 でも、ご両親に勘当されたことは？ 話してくれなかったでしょう？

大志 勘当なんかされてない。縁を切りたいのは、俺の方なんだ。

季之 今の会社についてはどうです。疚しいところは無いと胸を張って言えますか。

大志 言えるさ。

季之 あなたは、株式投資をやっていますよね。

大志 それがどうした。今どき、珍しいことじゃないだろう。

大志

季之  
大志

季之  
大志

季之  
大志

季之  
大志

季之  
大志

季之  
大志

季之  
明広

投資に失敗して、独立の資金が足りなくなっただんじやないですか。それで、止むに止まれず、会社の金を。

（明広に）意地でも俺が横領したってことにしたいようです。

森岡さん。横領の事実は、いずれ、必ず発覚するんです。あなたは会社に返済を求められる。金額は1000万。あなたが着服した金額です。

何だと？

返済を拒否すれば、警察に訴えられる。でも、あなたには支払うことができません。資金が底をついてしまったからです。だから、日高先生を頼ることになるんです。

また妄想の話か。起きてもないことが、なぜ断言できるんだ。

すべてが妄想だというのなら、教えてください。今、あなたの手元には、いくら資金があるんですか。

僕だけじゃない。日高先生にも、まひろさんにも、あなたの潔白を証明して

ください。

証拠はあるのか。俺が横領したって証拠は。

ありません。でも、あなたの会社に調べてもらうことは可能だと思います。

何を言ってるんだ？

あなたは営業二課でしたよね。直属の上司の方に僕が頼みにいきます。あなたがこれまで手がけた仕事について、数字を洗い直してほしいと。

バカ言うなよ。あなたにそんな権利はない。

森岡君。君はまひろを守りたいと言ったな。それなら、まひろのために真実を教えてくれ。君が潔白なら、それを証明してほしい。過ちを犯したのなら、



季之  
まひろ

素直に認めるんだ。  
僕は……。

本当のことを言つて。天野さんが間違つてるなら、そう言つてくれるだけでいい。証拠なんかいらぬから。

季之  
まひろ

まひろ。私は季之さんのことがちゃんと知りたいの。だから、本当のことを話して。

お願い。  
最初は偶然だったんだ。

季之  
まひろ

何が？

季之

横領だよ。3年前、俺は、売上を入金し忘れたことがあつた。そしたら、それがなぜか、未回収分として処理された。会社に入れる必要がなくなつたんだ。俺は浮いた金で株を始めた。最初はそこそこ儲かつたんだ。それで味を占めて、売上の数字を少なめに報告するようになって。

明広  
季之

引き返せなくなつたということか。  
続けるしかなかつたんですよ。だんだん負ける回数が増えて、取り返すにはもっと金を注ぎ込むしかなかつた。貯金が減つていつて、それでまた会社の金に手を出して。その繰り返しで、身動きができなくなつたんです。

まひろ

でも、もう終わりにしたかつたんじゃないの？ だから会社を辞めるんです  
よう？

季之

今なら逃げられると思つたんだよ。なのに、天野さんが現れた。昔のことまで引つ張り出されて怖くなつた。だから、負け分を一気に取り返そうとして。

大志  
季之

また投資をしたんですか。  
今度は先物つてヤツだよ。銀行やローン会社に金を借りて。たった一日で、

大志  
季之

1000万が消えた。バカげた話だ。それはいつの話ですか。四日前。あんたが日高先生に登記簿を見せた翌日だ。もし会社に返済しろと言われたら、2000万の借金を抱えることになる。そんな金が返せるわけがない。

明広  
季之

それで。これからどうするつもりだ。

明広  
季之

一から出直したいと思います。先生に援助さえしていただければ。援助とは。

明広  
季之

身勝手を承知でお願いします。僕に2000万、貸してもらえないでしょうか。そうすれば、借金を清算できる。警察にも訴えられずに済むんです。

まひろ  
季之

何もなかったことにするつもりなの？

明広  
季之

仕方ないだろう。他に方法がないんだから。

明広  
季之

出直すつもりなら、会社にすべてを話すべきだ。

まひろ  
季之

なぜです？ 金さえ戻せば、何の問題もないでしょう。

まひろ  
季之

本気で言ってるの？

明広  
季之

(明広に) 一度だけでいいんです。僕を助けてください。実家に泣きつくわけにはいかない。先生の他に頼れる人がいないんです。

明広  
季之

勘当されたというのも、事実なんだな。

明広  
季之

すみません。7年前の出来事についてお話ししたことは、全部、僕のことです。

明広  
季之

君が兄を引きずり込んで、会社を作ったんです。

明広  
季之

君はその頃から変わっていないようだな。

明広  
季之

これからは違います。もう誰にも見栄を張ろうとは思いません。だから、今

明広  
季之

回だけ、僕に力を貸してください。お願いします。

明広 変わりたいたいなら、罰を受けるべきだ。自分の過ちを引き受けるべきだ。君が

季之 変わろうとしない限り、手助けをするつもりはない。  
先生。

明広 よく考えるんだ。やり直すとはどういうことなのか。

季之 わかりました。あなたの力は借りません。

まひろ 季之さん、待って。

季之 悪い。もう話すことは何もないよ。

まひろ でも。

季之 ごめん。……ごめん。

季之が去る。

明広 (まひろに) 何を言おうとした。引き留めようとしたのか。

まひろ わからない。ただ、季之さんが寂しそうだっただから。

明広 おまえはどうなんだ。

まひろ わからない。何から考えたらいいのか。

明広 そうだな。私も同じだ。

大志 すみません。

明広 なぜ君が謝るんだ。

そこへ、恵菜と宇田川がやってくる。

恵那 まひろ。

まひろ

恵菜。どうしたの？

恵菜

どうしたじゃないよ。下見はどうなったのかと思って電話したら、全然繋がらないから。

まひろ

ごめん。

宇田川

今、そこで、森岡さんがタクシーに乗るのを見かけたんだ。すごく思い詰めた顔だった。来てみたらドアは開けっぱなしだし、何かあったのかと思って

恵菜

ヒヤヒヤしたよ。

明広

ヒヤヒヤしたのはこっちよ。譲君が天野先生に余計なこと言うから。

大志

余計なこととは。何でもありません。

恵菜

(まひろに)それで？ 森岡さんと、どんな話をしたの？

まひろ

いろんなこと。多分、結婚はしないことになると思う。

恵菜

本当に？ 森岡さん、納得してくれました？

まひろ

違うの。季之さんの方から、もう話したくないって。

恵菜

そうなの？

まひろ

(頷く)

明広が苦しそうな表情で、左胸を押さえている。

宇田川

(気付いて) 日高先生？

大志

嘘だ。

まひろ

え？

宇田川

日高先生、どうかしましたか？

明広　ちよつとな。急に胸が。  
まひろ　（駆け寄って）お父さん？　どうしたの？  
大志　（駆け寄って）日高先生、胸が痛むんですね。僕に診させてください。  
明広　病人扱いはやめてくれ。  
大志　いいですから。

大志が明広の脈をとる。

まひろ　本当に大丈夫？  
恵菜　救急車を呼ぼうか？  
明広　大袈裟だな。  
恵菜　でも、病院に行った方が。  
明広　そんな必要はない。もう痛みはなくなった。心配かけて悪かった。  
宇田川　どうなんですか、天野先生。  
大志　この様子なら大丈夫。おそらく、疲れが出ただけでしょう。日高先生、今日はしっかり休んでください。  
宇田川　（明広に）俺の肩につかまってください。  
明広　結構だ。一人で歩ける。  
恵菜　駄目です。譲君、行こう。

恵菜と宇田川が明広を支えて去る。

まひろ　さつき、「嘘だ」って言いましたよね。あれはどういう意味ですか。

大志  
まひろ

大志

まひろ  
大志

まひろ  
大志

まひろ  
大志

まひろ  
大志  
まひろ  
大志  
まひろ

さあ。そんなことを言った覚えは。

ごまかすのはやめてください。父が心臓の病気で入院するって言ったのは、天野先生じゃないですか。

そうでしたね。でも、発症するのは、まだ先の話です。だから、僕も驚いたんですよ。

どんな病気なんですか。本当のことを言ってください。

僕の一度目の人生で、日高先生は、拡張型心筋症の一種と診断されました。この病気では最終的に、心臓より早く脳の活動が停止してしまうんです。入院から半年後、先生は意識を失い、自発呼吸ができなくなりました。そして更に半年後、あなたは医者から、延命治療の中断について打診を受けたんです。

治療の中断？ そんなこと、私には決められません。

一度目の人生でも、あなたは同じことを言いました。でも、人工呼吸器にかかる治療費は膨大です。僕も、できる限り助けようと思いました。あなたが、あなたは僕に迷惑をかけたくないと言いました。そして、悩んだ末に。

事故に遭ったんですね。

ええ。僕は、二度目の人生で、あなたを絶対に助けたかった。日高先生の病気を治したかった。

だから、医者になっただけですか。

ええ。待っていてください。必ず、治療法を見つけてみせますから。わかりました。待ってます。

あなたは大丈夫ですか。

え？

大志  
まひろ

森岡さんとのことです。  
私は季之さんと会ってる時、いつも少しだけ不安でした。お互い、どこかで無理をしているような気がして。だから、これでいいんです。私もやり直します。

大志

そうですか。

まひろ

天野さん。ありがとうございます。

大志  
まひろ

僕の方こそ。信じてくれて、ありがとうございます。どうか、幸せになってください。あなたも。

大志が去る。入れ替わりに、恵菜が戻ってくる。

恵菜

天野先生は？

まひろ

今、帰った。

恵菜

あんたに何か言わなかった？

まひろ

幸せになれて。

恵那

そうか。

まひろ

(俯く)

恵那がまひろの肩を抱く。二人が去る。

三月十八日昼。準備堂書店の休憩室。公香がスケッチブックに絵を描いている。莢子がそれを見ている。

莢子　ねえ、公香ちゃん。このキャラクター、誰の漫画に出てきた？

公香　これはです。

莢子　待って、言わないで。自力で思い出すから。

公香　それはちよつと難しいんじゃないかな。

莢子　どこかで見えたような気がするんだけど。この、全体的に丸いライン。

奥から、深見がやってくる。

深見　あら。まひろちゃん、まだ来てないの？

公香　接客中じゃないですか。きつとまた、本を探すのを手伝ってるんですよ。

深見　呆れた。長山さんが待ってるのに。まあ、そこがまひろちゃんのいいところ

なんだけど。

（絵を示して、公香に）わかった。これ、深見さんがモデルなのね？

公香　正解です。

深見　（見て）これが僕？　なんでバレリーナの格好してるのよ。



公香

（菟子に）私、気がついたんです。最初から、架空の人物を描こうとするから無理があるんだって。

菟子

それで、身近な人をモデルにしたわけだ。いいと思うよ。線が弾んでる。

深見

何々？ 公香ちゃん、漫画家、目指すことにしたの？

公香

また決めてません。イラストレーターもありかなと思ってて。

深見

早く決めなさい。迷ってるうちに、ババアになっちゃうんだから。

公香

深見さんはどっちになるんですか。ジジイかババアか。

深見

そんなの、聞くまでもないでしょう。

まひろ

すみません、お待たせして。

菟子

気にしないで。いきなり来たこつちが悪いんだから。

まひろ

公香ちゃん。僕たちは売り場に戻ろう。

菟子

原稿を受け取りました。お疲れ様でした。

まひろ

ありがとうございました。書き直しをさせていただいて。

公香

待った甲斐がありました。

深見

え？

（菟子に駆け寄り）どういう意味ですか？ 出来がよかったってことですか？

ちよつと、公香ちゃん。

深見 深見  
（公香に）このまま出版できるレベルです。私の目は間違ってますよ。

公香 公香  
みんなでお祝いしましょうよ。お寿司？ それとも焼き肉？

まひろ 長山さん。お願いがあるんですが。

まひろ 何でしょう。

まひろ レイニーの作品を何度も読み返しているうちに、気付いたことがあるんです。この人は、私に似てるんじゃないかって。変に真面目で、頑固なところが。

まひろ だから、レイニーの他の作品も翻訳させてほしいんです。

まひろ 実は今日、そのつもりで来たんです。（封筒を取り出す）レイニーの初期の代表作です。日本で初めて発表されることになりました。その翻訳を、日高

まひろ さんにお願いたいです。

まひろ すごいじゃない、まひろちゃん。

まひろ （英子に）ありがとうございます。よろしくお願いします。

まひろ 頑張ってくださいね。私も頑張りますから。

まひろ 言われなくても頑張るわよ。まひろちゃんは。

深見と公香が去る。

まひろ さてと。まひろさん。今朝、大志を羽田まで見送りに行ってきたの。

まひろ 見送りっていうのは。

まひろ あの子、シカゴへ行ったのよ。向こうの大学で研究するために。

まひろ 今日ですか？

大志がやってくる。コートを着て、ボストンバッグを持っている。

大志

姉さん、わざわざありがとう。

大志

どういうつもりなの。昨日、電話してきて、今日出発するなんて。

大志

本当は、もうちょっと早く行くはずだったんだ。でも、大事な仕事があったから。

大志

仕事もいいけど、そろそろ彼女を作ったらどうなのよ。

大志

いいんだよ。僕は、ずっと一人でいいんだ。

大志

寂しいこと言わないでよ。好きな人ぐらい、いるんでしよう？

大志

別にいいだろう。

大志

いるのね？ どんな人か教えてよ。

大志

明るくて、ちよつと頑固で、いつも一所懸命な人だよ。彼女が頑張ってると思えば、僕も頑張れる。

大志

そう言えば、まひろさん、いい翻訳家になりそうよ。

大志

そうか。

大志

何か伝えることある？

大志

(首を横に振って) それじゃ、行ってくる。

大志

大志が去る。葵子が大志の背中に向かって手を振る。まひろが大志を見送る。

大志

まひろ

まひろ

長山さん。弟さんは、いつ日本に帰ってくるんですか。

まひろ

さあ。研究に目処がつくまでは帰らないつもりだって言ってたけど。

まひろ

そうですか。じゃ、シカゴの住所を教えてくださいませんか。

まひろ

まひろ

まひろ

まひろ

まひろ

まひろ

茨子  
まひろ  
「アパートはこれから探すんだって。決まったら、知らせようか？  
はい。お願いします。  
じゃ、打ち合わせを始めようか。」

まひろが椅子に座る。茨子と打ち合わせを始める。  
1年後、シカゴにある大志の部屋。大志がやってくる。椅子に座って、新しい本を見る。ペンを取り出して、手紙を書く。

大志  
「前略。日高まひろ様。シカゴに来て一年が経ちました。あなたと日高先生  
の様子姉から聞いています。今朝、姉が送ってくれた本も受け取りました。  
一言、お祝いが言いたくて、手紙を書いています」。

1年後、準備堂書店の休憩室。まひろが椅子に座って、手紙を書く。

まひろ  
「天野大志様。お久しぶりです。この度、私が翻訳した短編集が出版される  
ことになりました。長山さんがあなたに送ると言ってくれましたが、届いて  
いますでしょうか」。

1年後、まひろ宅。明広に茨子がまひろの本を渡す。恵菜・宇田川・千夏がやってくる。  
まひろの本を全員で読む。

大志  
「シカゴの天気は変わりやすいので有名です。朝は暖かくても、夕方に雪が  
降ったり」。これじゃ天気予報だ。(便箋を丸める)

まひろ

大志

「もつと早く手紙を書きたかったのですが、仕事に夢中になっ  
一年が経ってしまいました。私は元気です。充実した毎日を送っています。」  
「時々、ミシガン湖の岸辺を一人で散歩しています。海のように大きな湖で  
す。天気のいい日は気持ちがいいです。まひろさんがここにいればよかった  
のにと思います」。駄目だ。こんなこと書いたら引かれる。(便箋を丸める)

まひろ

大志

「よかったら、返事をください。元気ですの一言で構いません」。

まひろ

「今、僕に言えることは一つだけです」。  
「今、私に言えることは一つだけです」。  
「どこにいても、あなたの幸せを願っています」。  
「どこにいても、あなたの幸せを願っています」。

まひろ

まひろと大志が空を見上げる。青空がどこまでも広がっている。